ISSN 0910-3090

國語國字

國語問題協議會報

平成二十年十一月八日發行

第百九十一號

目次

第八十二回講演會

今の俳句……山西　雅子　1

國語の品格……新保　祐司　11

私と國語問題……早川　聞多　24

追悼

萩野貞樹を想ふ……桶谷　秀昭　28

萩野貞樹先生と私……上田　博和　31

會員寄稿

言葉の雑學（十一）……鹽原　經央　35

聖書に於る國語問題（その九）……松岡　隆範　39

契沖と悉曇（その三）……谷田貝常夫　42

縦書きの意識と感覚……若井　勲夫　45

きおふ……髙崎　一郎　52

だちづでどの話（第二回）……髙田　友　55

會員通信……出口　確　58

和歌俳句……60

編輯後記……谷田貝常夫　63

題字　近藤　祐康

今の俳句

山西　雅子

只今御紹介に預りました山西でございます。本日は此の様な席に御招き戴きまして本當に有難うございます。實は始めに先生に御話を戴きました時は、まことに申し譯ないのですが一旦は御斷りしようかと思ひました。と申しますのは、實は私は御覽のとほり一般の俳人でございまして、學者でも研究者でも無く、專門家の皆様の前でお話する様な內容の事は何程の事も無い譯です。此の様な譯で御斷りしようかと考へたのですけれども、世の中には緣といふ良い言葉もございますし、今の俳人の比較的若造と言はれる年代に、かういふ風に考へる者もゐるのかと思つて戴くのも面白いかと思ひまして、本日參つた譯です。

先程、谷田貝先生がお話して下さいました様に、私は產經新聞に短いエッセイを載せました。その內容と申しますのは言葉の面白さなのですけれども、小さい頃に氣になりました「滿たない」といふ言葉の話題に始まりまして、俳句を始めることにより文語の美しさを知る事が出來たといふ様な事を取り留め無く書いた物です。その中でも私が言ひたかつたのは文語は死んだ言葉ではないといふことです。俳句をしてゐるとそれが實感としてあるのです。

文語を自然に使つてゆく中で其處に自分が生きてゐる、生きた言葉だなといふことを感じる譯なのです。それは何も俳人だからと言ふのではなくて、私は小學生の息子の母親なのですけれども、その小さな子供にでも訴へ掛ける力を持つてゐるといふことを日々感じます。

喩へばの例なのですが、息子が未だ小さかつた時に東西南北が未だよく分らない、大人に成つてしまふと當り前の事でありますが、小さな子供にとつてはピンと來ないのです。それが或る日の夕暮れ、二人で手を繫いでバスから降りた瞬間、夕陽がとても奇麗だつたのです。

そこで與謝蕪村の「菜の花や月は東に日は西に」といふ俳句を敎へまして、それに加へて、柿本人麻呂の「東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ」の有名な歌を敎へて、色々話をして聞かせたのです。子供は割合ストンと覺えまして、結局は文語はその響きが良い、調べが良いのです。ですから、そのお蔭で子供も方位をきつちり覺えられました。今でも得意げに暗唱いたします。

小學生なので歌なんか聞かせてくれる事もあります。六

年生なので入學式で一年生の世話をした際、歌を唱つたと言ふのです。文語の歌詞、なので持つて來てと頼みますと、横濱市歌でした。私は實は關西出身でございまして、ですから横濱市歌の事を恥かし乍らそれ迄知らなかつたのです。

素敵な歌詞ね、あれあれと思つて見てゐますと森鷗外の作詞なのです。それを現代の子供が得意げに唱つてゐる景色は私にとつては素敵な光景に思へました。意味などを掻い摘んで話しますと、なるほどねえと言つて、何度でも唱つてくれました。

かういふ感じで幼い子供と話してゐても、文語といふ物は現代の人間に對して訴へ掛ける力を失つてゐるわけではないと本當に思ふのです。けれども、受取る側でなくて實際それを使ふ、それで以て創作するとなりますと、さういふ意味での文語の使ひ手は、矢張り寡いのではないかと思ひます。

その中で新しい文語の作品が或る一定の量として產み出されてゐるのは何だらうかと考へた時、意外にも俳句なのですね。次が短歌だと思ひます。

さうなりますと、俳句と短歌といふ物は文語の最後の砦だと大外れた事までは思つてをりませんが、さういふ言葉を聞きますと、何氣無く始めた物だけれども責任は重大だと思ひます。

もう亡くなつた歌人ですが、上田三四二といふ優れた方がいらつしやいました。

短詩型文學を船の底荷に喩へられた有名な言葉があります。俳人や歌人に限らず、新聞の投稿欄に投稿される愛好者の方も含めまして多くの人が未だ短詩型を愛してゐる。その事が若しも日本語の底荷のやうな役割を果してゐるのであれば、かういふ時代は續いて欲しいといふのは願ひとして持つてをります。

私、今、四十八なのですけれども、私が生きてゐる間は恐らく俳句は生きてゐるのだらうと思ひます。でも五十年後、私の息子が年をとつた時は、俳句はどうなつてゐるんだらう、或いは百年後、もしかすると國語の教室などで「嘗て日本には寶石のやうに美しい俳句といふ詩がありました。」なんて先生が教へてゐる、さういふ光景を思ふと本當に胸が痛みます。

ですから、さうならない爲にも、飛拔けた天才も必要なのですが、私のやうな普通の俳人にも俳句を次の世代に受渡す責務があると思つてをります。

ここから本題に入るのですが、今の俳句といふことで展

望しながら、次の世代に受渡す爲にどうしたら良いのだらうかといふ所で、危機感を覺える事が幾つかあるのです。問題點を三點ほど擧げてお話したいと思ひます。

まづ最初は、今は巨星落つといふ時代だといふことです。戰後短歌をリードして來た塚本邦雄ですとか、或いはつい最近ですと前登志夫といふ著名な歌人が次々と此の世を去つて逝かれる。又、俳人ですと飯田龍太が亡くなつた、これは本當に大きな出來事でした。或いは女性では桂信子といふ優れた俳人が……、次々と此の世を去つて逝かれるのです。哀しい事に、世の中一般にさういふ風潮なのですけれども、俳壇もその例にもれず、亡くなるとその方の業績がしだいに忘れられていく。

人間が使ひ捨てにされてゆくのかも知れませんが、生きてゐる間はちやほやされてゐるのですが、亡くなると直に忘れられてしまふといふことが、俳壇でもままあります。

今は、スピーディーな時代なのですけれども、それではいけないのではないか、次の世代へ受渡す以前の問題として、上の世代の方々の仕事をよく知り、檢證しなくてはならない、さういつた狹間の世代にゐると思つてをります。さうした危機感は綜合誌、結社誌にでもあるやうでして、最近、割合、俳句史を展望するやうな企畫が組まれるのです。

その中で座談會が開かれたり、研究がなされたり、今は俳句史の檢證に對して俳人が危機感を持ちつゝ取組んでゐる、さういふ時代でございます。

その一つの例なのですが、角川書店から最近『女性俳句の世界』といふ六卷のシリーズ本が出たのです。江戸時代から丁度私共の世代四十代後半迄を網羅した物で、作家論があり、百句選があり、といふ全六卷が出ました。實はさういふ本は今迄無かつたのです。出ても不思議ではなかつたのですが、女性俳句を展望するといふ事がこれ迄されなかつたのです。

私が俳句を始めた丁度二十年前は、女性俳句とは申しませんでした。女流俳句と言ひまして、年に何度も女流俳句特輯が誌に組まれました。百人とか二百人がざつと竝びまして寫眞が載つてゐるのです。百花繚亂といふか、女流特輯が組まれた時代もあります。さういふ時代を經て今は綜合的に見渡せる時が來たかと思ひます。

今後、私も女性ですので、後に續く女性の俳人達に、俳句歴史の中で女性が果した役割をどのやうに受渡してゆくのか、それは、作品や評論ですとか、振舞ですとか……俳人としての振舞ですね、傳へていかなくてはならないと思

ひます。

次に危機感を覺えることの二點目なのですけれども、これは俳句といふジャンル固有の事で、季語の問題です。

今、新しい歳時記が次々と出てをりまして、角川書店から大型歳時記が出たり、或いは文庫判の歳時記がリニューアルされて出てゐます。或いは御覽になつた方があるかと思ひますが、小學館から週刊の歳時記が、奇麗なビジュアル本で全五十卷ださうなのですけれども、俳人だけでなくて一般の方々も手に取つて下さつてゐるやうです。今、丁度「和」のブームがありますよね、「和物」に對するブームです。この一環かと思つてをります。

話が少し脱線しますが、私、本日此の様に着物を着て參りました。形から入らうといふことで、俳人としてなるべく外へ出る時は着物を着てゆくのですが、最近、街を歩いてゐますと着物の方が増えたなあといふ實感があります。それは御年を召した方だけではなく、若い方に隨分増えた感じがするのです。

その方々の着熟しを見てゐますと、私達が娘の頃とは多少違ふのです。どんな物を着ていらつしやるのかなといひますと、明治や大正の雰圍氣を持つ着物を着ていらつしやる方も多いのですね。或いは、その暫くは羽織といふ物が餘り流行らなくて、コートが流行つた時代が長く續いたのですけれども、羽織を着てゐる方もゐて……。どうやらリサイクルとかアンティークとかいふ所で御買ひ求めになつて、そして新しい着崩し方或いは着熟し方をしていらつしやるみたいです。

さういふ事を觀てゐますと「和」といふものが今流行りですが、その流行りの中で變容していくものもあるのではないのかと思ひます。それは着物の分野だけでなく他の分野にもあるかもしれないし、俳句の分野はその一つと感じます。

歳時記の話に戻りますが、例句を入れ替へたり、季語の解説の分野が充實したりしてをりまして、工夫の跡が感じられる物が多いのです。でも、一番問題なのは外側ではなく季語の中身なのでありまして、季語をどれだけ體驗できるかが俳句の中で大きな問題になつてゐます。

例へば夏の歳時記を開きますと、「牛冷す」なんていふ季語があります。「牛冷す」「馬冷す」といふ季語です。私の大好きな秋元不死男の「冷されて牛の貫祿しづかなり」といふ句があります。或いは飯田龍太の「いつまでも暮天のひかり冷し馬」、暮天とは夕暮の天です。本當に莊嚴な景色を感じさせるもの、素晴しい作品がこの季語からは生

れてゐます。でもお恥かしい話ですが私は、「牛冷す」といふ實景を見たことが哀しいことにありません。

實は先日、私の家の者は古い映畫が好きなのですけれども、成瀬巳喜男といふ映畫監督の「鰯雲」がBS放送で放映されてゐました。家の者が見てゐまして、私もチラッと覗いて見てゐました。主人公が淡島千景さんで、着物の着熟し方も奇麗だと思ひました。戰後の農家の分家と本家の確執を背景にしたドラマで、淡島千景の丁度甥子に當る本家の長男が、牛で田を鋤いてゐるのです。私、關心があるものですからまじまじと見てしまひました。家に歸つたら、ビデオに撮つてあるので改めて見てみたいと思ひますが、さういふ物も自分は見てゐないなといふ悔しさがあります。

それでも、私は横濱に住んでゐるのですが、家の近くは面白い所でして、牛舍もあります。豚舍もあります。鷄舍もあるのです。川も流れてゐまして、子供は蜊蛄（ざりがに）を釣つたり、蝌蚪（おたまじやくし）を掬つたり、兜蟲捕りが出來たりと、さういふ所が殘つてゐるのです。自治體によつて殘されてゐるのですが、さういふ所はどちらかといふと珍しくなりつゝあるのかもしれません。

私の父母がこの閒泊りに來て「この邊は雀がゐるわね」と吃驚するのです。雀が外來種に驅逐されて寡くなりつゝあるといふ事を初めてその時に知りました。それで母に訊きますと、私の實家のあたりも雜草が殆どなくなつてゐるといふ哀しい話をするのです。

このやうにして季語がどんどんなくなつてきて、私達はどうしたらよいのかと、非常に切實な問題として考へてゐます。

俳人といふのは、「詩を作るより田を作れ」と言ひますが、實生活上は非力で歌だけ上手なカナリアのやうなものともいへます。歌が好きで歌を歌ふけれども、狀況が惡化すれば、先づは死んでしまふやうな、さういふ存在なのかもしれません。でも、非力なら非力なりに何か出來ないのかと考へてゐます。

三點目に、此の協議會と問題意識が重なる所である、文語と假名遣のことがあるのですが、その前に一つだけ季語のことを補足させて下さい。

季語といふのは俳句の切實な問題だと申しましたが、俳句が季語を持つてゐるといふことは、只、季節感を表はす以上に俳句にとつて背骨になるやうな物ではないのかと思つてをります。よく俳句の初心者の方にこの事を話しますと、あれつと思はれてしまふのですが、「俳句の季語の根

本義」といふのはただ季節感を表はすといふ事にとどまらず、その先にあるのではないかと私は個人的に思つてをりますので、後で少しお話をさせて下さい。

それでは俳句のこれからについての危機感といふ點で、三つ目の問題點となる文語と假名遣についての話に移ります。

歳時記をはじめから開いていただくと面白い事に氣附かれると思ひます。皆さん、歳時記を御持ちの方も澤山いらつしやいますけれども、最初に芭蕉や蕪村など江戸時代の作品が竝んでゐて、それから近代・現代の作品が竝んでゐるのですが、これがまさしく俳句的風景なのです。他の文藝ではかういふ光景は少し違和感がありますが、未だに俳句は時代を隔てた作品が併存してゐても何等違和感を感じないのです。これが俳句の實情でございます。

どうしてなのか短歌と引き較べて考へて見たのですが、もしかすると俳句が短歌と違つて歴史が淺い文藝であるといふことがその理由なのかもしれないと思ひます。萬葉集の時代から續いてゐる和歌、其處から連綿と續いてゐる短歌の歴史と較べますと、俳句は未だ本當に歴史が淺い物、ですからそれ自身の中での言葉の變遷が未だ少い文藝だといふことです。

最近、蕪村に凝つてをり、調べてゐたのですが、かういふ句があるのです。諳唱してみます。「酒を煮る家の女房ちよとほれた」。

「ちよとほれた」といふ所が可愛いらしいですね。「酒を煮る」とは「酒煮」といふ季語がございます。初夏に酒を長く保存する爲に火入れすることなのですが、造り酒屋さんなんかでは「酒煮の祝ひ」といひまして「振舞酒」をしたりするのです。澤山酒を振舞つて貰ふと女房が好い女に見える、さういふ事なのです。

別に色戀沙汰の大變な事ではなくて、一寸した洒落、一寸した樂しみといふ御洒落な句ですね。「ちよとほれた」といふ日本語の活かし方が面白いと思ひます。

この例に顯らかなやうに、俳句といふのは抑も俗語を大膽に取り入れる。そして、俗語を詩の言葉に高めてゆく。其處に俳諧の言葉がございます。發生の時點で俳句といふものは文語だけの世界ではない。ですから、現代の人々が現代語を取り容れて自由に俳句を作るといふことは、私は何等否定はしてをりません。

日本の古典ばかりではなく、漢籍などからも榮養を澤山貰つてゐる、それが俳句の歴史であり、様々なレベルの言葉を取り容れてすべて榮養にしてゆくといふジャンル固有

の力があります。ですから、自分が『俳句で樂しく文語文法』といふ本を書いてゐるのですが、もし「嚴密に言へ」となると「俳句は文語でなければならぬ」とは思つてゐないのです。

ただし、「文語でなければならぬ」と思つてはゐないけれども、文語の素晴しさは十分認めてをり、「文語をいかしたい」とは思つてゐるわけです。

もう少し突き進めまして、もし俳句で文語を使ふならば、文語として違和感が無い使ひ方をしたいといふ運用面の思ひがこの頃強く涌いてをります。

もう一つは原理面の事ですが、「俳句の言葉は古今集以來の傳統に則つてゐる歌語とは確かに違ふ物、だけれども、歌語・雅を否定してゐるものではない」と、きつちり押さへたいと思つてをります。

さて、運用面の事ですが、先程紹介されたやうに『俳句で樂しく文語文法』といふ、かなりやはらかい題名の本を出してゐるのですけれども、この「樂しく」といふのは、「學校文法の域を出ないで易しく學ぶ」といふことなのです。そして、さういふ物を買つて下さる方があるといふことはニーズがあるといふことなのですね。俳句の世界で文法を學びたい、使ひたい欲求があるけれどもどう使つていいか迷ふといふ方々が買つて下さるやうです。

先生方は驚かれると思ひますが、どんなことを書いてゐるのかといひますと、例へば國語辭典を引いて「歴史的假名遣」を見つける方法、當り前のことだと思はれますが、御存じでない方も多いのです。「かうしたら見つけられますよ」とか、動詞の下に「カ四」と書いてあるのは「かういふ意味ですよ」とか、本當に簡單なことから書いてあります。

今迄あつた本といふのは、「文法に迷つたら辭書を引きなさい」と書いてあるのです。でも、辭書を引く前提となるのは品詞分解です。品詞分解をしようと思つても、どこで分れるのか解らない人が多いことに氣附きまして、私の本は「辭書が引けるやうになる本」、さういふ物でございます。

その中で間違ひ易い例を幾つか擧げたのですが、著名な俳人達でも割と多いのが「樂しかり」とか「嬉しかり」とかの「カリ活用」の連用形で、それを終止形の代りに使つてしまふ人がゐるのです。「終止形に『カリ』が使はれるのは、『多かり』のみと言つて良い」と何度書いても、「樂しかり」「嬉しかり」といふのは跡を絶たない。これは、もう少し聲を大にして言はなければならないと思つてをり

ます。

或いは、「秋深む」「深み往く秋」のやうに、本來、他動詞であるべき「深む」が自動詞的に使はれてゐたりとか。

或いは、「紅葉する」といふ意味の「もみづ」といふ言葉があります。これは「上二段活用」なのですが、完了の助動詞の「ぬ」を附ける時に、勝手に「もみづりぬ」などと有り得ない活用を作つてしまつたり、よくあります。

文法は助動詞が難しいと言はれますが、その以前の動詞の假名遣の誤りがよく見られます。「動詞」や「形容詞」が誤つてゐるのが非常に氣になります。例へば音便なども、さうなのですね、「ウ音便」を知つてしまふと「思うて」と書くのと「思ふて」と書くのとどちらが正しいのか却つて判らなくなつてしまふのです。又、「イ音便」を知つてしまふと「書いて」といふところでワ行の「ゐ」を使つて「書ゐて」としてしまつたり、「書ひて」とハ行の「ひ」を使つてしまふことがあるのです。

さやうな「假名遣」の誤りは非常に多いのです。ただ、活用しない語における假名遣の誤りといふのは、文法の誤り以前の問題ではないかと私は思つてゐます。「和語」の假名遣といふのは辭書を引くと必ず分ります。字音は出てゐない物もありますけれど、簡便な辭書でも和語の假名遣は分ると思ひますので、流石に假名遣を誤つてゐる俳人はもう少し御自身の作品を大切にして欲しいと思ひます。

以前或る雜誌で少し假名遣について一年半程の連載をしたのですけれども、その時は萩野先生の著作など隨分參考にさせて戴きました。本日は萩野先生に御目に懸れるのを樂しみにしてをりましたが、さういふ意味で胸が詰る思ひでございます。

萩野先生だけではなくて、福田恆存先生の「私の國語教室」……。この本を大切にしてゐます。

一言、文法の間違へについて付け加へさせて戴きます。ここが注意しなければならない所で、「文法が間違つてゐること」を一寸言ひますと、全人格が否定されたやうな憤りを持たれる俳人が多いのです。作家の全てを否定されたと思はれる。そんな事はないのです。「或る俳句の或る部分が違ふ」といふことと「作家全體の仕事への評價」は別物ですので、私は文法的な事を謂ふ際には愼重な發言を心掛けてをります。やはり、若い者が文法を武器にして大家の揚げ足を取るのは氣持の良いものではない。そのやうなことをしてゐると誤解をされるのは辛いものです。

文法に對する姿勢を思ふ時に、私は何時も山田孝雄先生の本の一節を思ひ出します。「俳諧文法概論」といふ非常

に感銘を受けた本からなのですが、讀ませて戴きます。芭蕉の「荒海や佐渡に横たふ天の河」の句の部分で、「これはたゞ語法上の破格と云ふべき範圍のもので無く、用語の誤謬といふべきものである。如何に芭蕉の句と云うても誤は誤とせねばならぬ。我々は芭蕉を尊敬することは人後に落ちないが、その過誤をまでも辯護することは出來ぬ。芭蕉といふ一個人よりも國語の純正が重大である。」と書いてあります。

細心の心遣ひで書かれた言葉だと思ひます。芭蕉への侮りは全く感じられない、國語への眞摯な心が感じられるだけなのです。私は文法を言ふ時には、此の言葉を心の隅に置かねばならぬと思つてをります。

文語上の誤用についての話については、話せば切りが無いので、このぐらゐでやめておきますが、もう一つ先程「後でお話したい」と言ひました内容の「俳句における季語の意味」、そして「俳句の言葉と雅語の關係」です。

俳人全體といふより一俳人の言葉として聞いて下さいませ。季語は季節感を表はす言葉と一般に言ひます。それはそれで間違つてゐないと思ふのです。日本は四季がある、素晴しい國だと思ひますから。でも、季語は單なる季節感の指標に終るものではないことを、何度でも繰返し、俳人は考へなくてはならないと私は思ひます。

例へば、また芭蕉に戻りますが、有名な句に「古池や蛙跳び込む水の音」がございます。この句への憧憬ですか謂はゆるオマージュと思ふのですが、蕪村によく似た句があります。

「古る庭に鶯鳴きぬ日もすがら」と。似てをります。蕪村が二十九歳の時の作品です。初めて蕪村といふ、それまでは「宰鳥」といふ名で通つてをりましたが、初めて「蕪村」と號した、要するに俳人としての出發點と言へるやうな俳句なのです。師匠を亡した後でしばらく放浪を續けてゐたのですけれども、自ら其處で歳旦帖を編んで蕪村號を使つた、或る意味で肩に力の入つた句だと思ふのです。

此の兩句に表れる蛙と鶯なのですが、よく考へて見ると、古今集の假名序に「花に啼く鶯、水に住むかはづの聲を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける」とあります、鳴く生き物の代表といふことで。どうしてかういふ句を作つたのか、要するに芭蕉翁の風雅に憧れる氣持が作らしめたものです。

かういふ蕪村の作品を讀みますと、蕪村から芭蕉へ向けてゐる敬慕の念ですね、敬愛の念、慕はしい懷ひの先を辿つて往くと、言葉を介在して一筋に流れて來る歴史が實に

よく傳はつて來るのです。

ですから季語といふものは季節感を表はすものなのですが、眼前にある季節のものだけを取つて來る、すなはち今ここのものであると同時に今ここのものでない、假に今ここのものであつたとしてもそれを由らしめてゐる時間の流れと空間の廣がりの中にあるものである。この二重のありやうを、どこかで常に意識してゐないと俳句は痩せるのではないかと思つてゐます。

季語だけではなく文語或いは假名遣に對しても、二つの視點を常に持つてゐないといけないなと思つてをります。

最後に今迄の話の總括とさせて戴きます。

私は學問的なことではなく、飽く迄も實感で一つ一つ摑む中から色々な事を考へて來たのですが、俳句をしてゐますと「言葉つて良いな」と素朴に思ひます。そして、言葉といふのは人と通じ合ふ爲にあるのだと強く感じるやうになりました。

俳句は「座を圍む」と言ひますけれども、親密な空間の中で言葉を遣り取りしてゐると、言葉は「手に乘せられるやうな質量があるものだ」と、何か幻想かもしれませんがさう思ふのです。

言葉を、質量を伴つた物を、差し出す時に水平方向に行くだけでなくて自分の中にも沈んで行く物があつて、自分の中で聞いてくれる何者かがゐる。それも幻想なのかもしれません。しかし俳句を作つてゐると、水平方向の言葉と共に垂直方向の言葉の質量を實感として感じることがあります。

さういひましても、元々俳諧といふものは、面白さといふ所を含んでをります。泡沫のやうな言葉、はつと浮んでは消える、泡のやうな言葉の鮮度を、さつと掬ひ取つてくれるやうな所が俳句にはあると思ひます。

ですから、俳句がカバーしてゐる、覆つてゐる言葉の範疇はとても廣い。そのやうな廣い言葉の範疇を持つてゐる方が、文藝として痩せずに濟むと思つてをります。

さらに附け加へるならば、何かどんなに廣くても、一番芯の所には核として言葉の芯にあるモデルと言ひませうか、それを各々が持つてゐたい。これが俳句の志の有り所、さういふ風に思つて俳句を遣つてをります。

とりとめもないお話で誠に申し譯無いのですけれども、實感として今感じてゐることをお話致しました。これで終らせて戴きます。

（やまにし まさこ・俳人）

第八十二回國語講演會　平成二十年五月十日　於 日本倶樂部

國語の品格

新保　祐司

本日は、一時間餘り色々とお話させていたゞきたいと思ひます。

先づ、話の最初に時事問題みたいなことをしたいと思ひます。「文章は經國の大業である」といふ風に言はれます。「國語」といふのは經國の要（かなめ）であり規律といふわけですけれども、さういふ意味で、言葉の使ひ方がをかしくなつてゐるとか亂れてゐるとかは、單に若者とか現代の日本人が精神的に低下してゐるとかさういふことだけではなくて、經國の大業に影響することであるといふ事の方が問題です。

やはり「物事」といふのは上から澄まないと下からいくら澄まして見ても駄目であつて、「經國の大業」といふ所から澄んでいかないとまづいわけです。先の防衛省の前事務次官の不祥事が起きた時やイージス艦が漁船と衝突した時などに、ふと思ひ出したことがありました。或る記事を讀んで、何かかういふ事が起こるといふことを私は既に感じてゐたなと後で思つたわけです。

産經新聞に「明解要解」といふコーナーがありますが、そこの平成十九年四月二十三日に自衛隊の人材確保といふ記事があります。そこに寫眞が出てをりまして、「カイジョウジエイタイ」と片假名で書いてあるのです。これは中々人材が確保され難いといふ内容です。澁谷の忠犬ハチ公から一寸行つた所に交叉點がありますが、あそこに大型街頭ビジョンがあります。普段は流行歌手とかタレントとか映畫の宣傳とか、ガンガンうるさくやつてゐて、そこを歩いてゐる人間の耳が惡化して來てゐるわけです。記事によると、當年の三月に街頭ビジョンにユニークなコマーシャルが流れて多くの若者が足を留めた、と。テレビ番組の戰隊ヒーローシリーズをイメージした五人の隊員役の俳優が登場し、『海上最強鋼鐵の護衛艦』『地獄耳のドルフィン潛水艦』といふナレイションとともに海自の裝備を紹介し、「その任務に終りは無い、行け海上自衛隊」といふ決めゼリフで終つてをります。

これはテレビでも大變評判になつたといふことで、「幹部は大成功だつたと胸を張つてゐる。海自は、若者に自衛隊に關心を持つてもらふ事が制作の目的だつた」云々と書

いてあるのですけれども、大體、「海上自衛隊」と言ふ言葉も「海軍」と較べて言葉そのものの語感も威嚴が無いわけですが、それを片假名で「カイジョウジエイタイ」といふ風に表記してそれで話題を呼んで、大成功だつたと幹部は胸を張つてゐる。かういふ語感・言葉に對する感覺といふものが、「經國の大業」に關係するわけで、單にコマーシャルに使つただけといふものでは濟まないのではないのか。かういふ風に「カイジョウジエイタイ」なんて片假名で書いて若者に受けた事に悅んでゐる。海上自衛隊のモラルの低下はさういふ所に深い根があるといふ事、防衛省のモラルの失墜とは突詰めていけば言葉の墮落であると思つたわけです。

別に防衛省ばかりを非難してゐるわけではありませんが、偶々氣がついたものの例でもう一つ思ひ出したのは、一昨年の十月二十九日に横須賀で觀艦式がありまして、私は旗艦に乘せていたゞきました。相模灣沖に出て行つて一日懸りの船に乘るのですが、安倍前總理がヘリコプターで飛んで來て觀艦を行つた後で訓示をします。やはりその訓示も、「觀艦式の訓示で喋る日本語」といふ物が當然あるはずで、普段の挨拶ではないわけです、本來は。どうも觀艦といふ儀式は、個人の問題ではなく、今の日本では非常に難しいのだらうといふ風に思ひます。眞ん中で「崇高な使命」と出て來たのです。ところが、「崇高な使命」がポッと浮くのです。矢張り、崇高といふ言葉が本當に浸み込まないのです。とつてつけたやうなのです。

その觀艦が終つた後、歸りは横須賀に戻つて來る迄三時間か四時間の長いものなので、軍樂隊の演奏がありました。抑も、私が觀艦式に行つたのは、軍艦マーチを直接、生で演奏するのを聞いてみたいといふ思ひがありましたので參加させて戴いたのです。軍艦マーチは御存じのやうにオフィシャルな曲として認められてゐるといふ事で演奏されたわけですけれども、歸りの船の時に「皆樣、退屈でせうから軍樂隊によるコンサートを」といふ事なのです。その時に私の記憶によれば「今日のクルージングは」なんていふ言葉があつたのです。觀艦式に於て「クルージング」はなからう、別に船で遊んでゐるわけではないのです。

それともう一つは演奏曲目です。最初の曲が「八十日間世界一周」。その後勿論、マーチ的な物が掛かりますけれども、私が一番期待してゐたのが「海ゆかば」だつたのです。作曲者の信時潔について二三年前に本を書きましたので、洋上コンサートでも演奏するのではないかと、淡い期待を以て一所懸命に聞いてゐたのですけれども、最後の方

に、儀式的に使ふ曲がありますとの説明があつて、一部「海ゆかば」の前半の部分みたいな物だけが使はれてゐるのです。それは實に微妙な問題だと思ひますが、全曲は使はないのです。一部がパッと入つて來る。全然掛からなかつたわけではないけれども、「ちよつと、一部だけ」、さういふ扱ひでありました。

何を言ひたいのかと申しますと、「威儀」といふやうなことが日本に於て失はれてゐるといふことが感じられます。特に威儀が必要な、かういふ觀艦式、さういふものの中でも「八十日間世界一周」を聞いて下さいとか、さういふ事に觀艦式が終はつて了ふ。もつと變な事もありましたが、これ以上は言ひません。

今日は「國語の品格」といふ演題を掲げてをりますけれども、その一つに「威儀」といふ問題があるわけで、現在は品格が生まれ難い狀況にあるのであらうといふことなのです。この演題「國語の品格」は、藤原正彦さんの「國家の品格」にちよつとあやかつた、それ自身品の無いタイトルなのですが、この本が賣れて、「女性の品格」とか何とかといふブームにあやかつた本が一杯出てをりまして、それを書いてゐる人は抑も品格が無いのではないか、文章その物に品格が無いのではないかといふ本質的な批判があるわけです。品格を品格が無い文章で書いてゐる。これは皆様お笑ひになるけれども大變重要な問題で、今回の私の話にも大いに關係があるのです。

言葉その物に品格があつても、文章は「表現」なのですから、品格のあるといはれてゐる言葉を書くといふことと、「表現」に品格があるといふこととは別の問題なのです。品のよい國語といふだけのことならば、外面的な模倣でも出來ます。「表現」とは小林秀雄が言ひましたやうに expression, express 壓するものであつて、檸檬（レモン）を壓して搾り出すやうに、人間の內面、卽ち精神、記憶、聯想、その人の生きて來た事を搾る樣に出す事ですから、外面的に品がある言葉を使つたところで expression とはいかないのです。本當の問題はここにあるわけです。「表現の品格」とでも題したかつたところでありますけれども、今日はそのお話をしていきたいと思ひます。

では「品格とは何か」といふ事になりますけれども、言葉の表現の品格は中々說明し難い。例で言ひますと、私は「音樂の品格」といふ事を書いた事があります。音樂の品格では誰を思ひ浮べるか、どの作曲家か、どういふ曲か、と想つたわけです。

皆樣、色々と考へてをられませうが、私はブラームスで

す。特に「ブラームスの絃樂四重奏曲」です。小林秀雄は「もう僕は音は一杯要らないのだ、絃樂四重奏曲の四つの樂器で良いのだ、其處でもう十分に表現されてゐる。ゴテゴテとワーグナーみたいに音を使はれると品が無いのだ」と言ふわけです。良心が無いのではないのかとも言はれましたが、ブラームスでもシンフォニーでなく絃樂四重奏曲的な物です。音は一杯要らない、音は過不足無い物がいい。ベタベタと使はない、今みたいにダラダラと文をパソコンで書く樣になりましたけれども、さうでなく非常にコンパクトで必要最小限の物で表現されてゐる。これが品格の問題として一つあると思ひます。

あと、リストやワーグナーとは違ふ、ブラームスはああいふ風に新しい方向へ行つたのではない、新しい方向へは幾らでも行けた。才能豊かであんな事は出來たのだけれども、新しい物を遣らうとはしなかつた。だから、ベートーベンの「九つのシンフォニー」の後に「違ふシンフォニー」を二十年掛かつて書いたと、さういふ意味の保守的な考へ方、新しい物に飛び付かない傳統的な考へ方が品格の要素であると思ひます。

それだけではないのです。それだけだと固陋といふ事にもなりかねないのです。ブラームスは批評家の最高であつて、ベートーベンといふ音樂家を二十年掛かつて批評したのです。その上で一寸出す。ベートーベンを解つたけれどもそれで終つたわけではないのです。一寸出す。これが「固陋の傳統主義者であるか」、「ブラームスといふ新鮮な保守主義者であるか」を分ける重要な面であります。さういふものが集つてゐるのがブラームスの音樂であつて、音樂、言葉といふ物の品格を考へる上で參考になるのではないかと思つてゐます。

次へ行かせて戴きますが、さういふ意味で日本語といふ物に、威儀、威厳ですね、これが失はれてゐるのです。「崇高」です、sublime といふ感覺が失はれてゐる。

本日は、小田村會長が、親戚の御都合で御休みですが、御手紙を戴いてをりまして、その中で、私がお送りした『フリードリヒ　崇高のアリア』に觸れて、「今の日本では崇高さが失はれて了つてゐて殘念であるが、淺野晃の『楠木正成』を思ひ出した。淺野晃の本の中で、『英雄性』と『崇高性』、といふことが書かれてゐたことを思ひ出した」と書かれてをりました。確かに、崇高といふことは、今日、安倍前總理大臣が觀艦式の訓示の中で發言すると、周りから浮いてしまふといふ狀況です。

それと先程、「國語國字」第百九十號を見てゐましたら、七十八ページに、阿川弘之が、かう言つたといふことを福田恆存さんが引用してゐると書いてあります。

「あんた方、こんな滅茶苦茶な『現代かなづかい』なるものを本當に理解し本氣で容認して使つてゐるのか。あなた方の創り出す言語藝術の根幹を成すものは日本の國語であつて、作家なら自分の國語の正書法に關し、一通りきちんとした說明ができなくてはなるまいと思ふが、おできになるのか」

私は、普段、現代假名遣を用ゐて書いてゐるものですので、一通り說明できなくてはなるまいとも、お出來になるのかと言はれてゐるのに對して、私が考へてゐることを說明します。私の場合、正統表記となりますと、以前學生時代の二十位のときは正統表記で書いてをりました。それは齋藤磯雄さんといふフランス文學者の方を、神のやうに大變尊敬してゐたからです。特に『ヴィリエ・ド・リラダン全集』が、東京創元社から背革裝で五千圓位で、全五册出まして、それを讀んだこと、それとボードレールの『惡の華』の飜譯を讀んだこと、それと考へ方、文章を尊敬してゐました。

齋藤磯雄さんは、雲助文法、馬丁文字といひまして、現代假名遣を蛇蝎のごとく嫌つて、口をきはめて侮蔑してをられました。私もさう思つてをりましたし、ヴィリエ・ド・リラダンなんかは徹底した反俗でありまして、有名なことばで「生活、そんなものは下男共にまかしておけ」と、ひたすら、形而上的思索をしてをります。

かういふやうに若いときに良かれ惡しかれ影響を受けてをりまして、自分の能力を顧みずに反俗主義をやつてゐたわけです。當時は、正假名遣で書いてをりまして、最初に、『鬼火』といふ本を三十歳のときに出しました。これは二十二歳、二十三歳の頃書いた「北村透谷論」とか、「齋藤綠雨論」とか、「國木田獨步論」を自費出版したものです。それを出したをりに、いろいろな方々にお送りいたしまして、その中で福田恆存さんから葉書をいただきました。この閒文箱から見つけましたが、昭和五十八年の消印で大磯からの繪葉書でございます。『鬼火』を贈つたときにいただいた禮狀です。先づ、「序文」と「齋藤綠雨論」を讀まれましての御返事です。私は昭和二十八年生れなので、新字體、現代假名遣で執筆しましたが、印刷する際に、漢字の正字、正假名遣に優秀な編輯者に變換をしていただきました。正字正假名遣で本が出版されましたので、福田先生として外見的には讀むに堪へていただけたと思ひます。そ

の中で「文語文についての御見解ご尤もに存じます。「言文一致」は明治の不祥事、されど、そのほかに、いかなる道もなかつたことは事實です。この事實を必要惡と見るかどうかでその後の道が決まることでせう」と書かれてをります。齋藤綠雨は小說家として全然駄目だつた、その一つの原因として、言文一致で書きたくても書けなかつた、といふことです。書けなかつたこととは、高貴なる不能です。書けた奴がげびた奴であつて、「書けなかつたこと」の「高貴さ」を書いたわけですが、福田先生は「言文一致」の問題として取り上げられました。私は、齋藤磯雄の影響の下で、戰後生れながら、學校で敎育を受けたことがなくても正漢字正假名遣で出版してゐました。

三十歲をすぎるあたりになつて、考へ方や感覺が變つてきました。この邊、誤解をおそれずに言ひますが、中村光夫は明治大學で、齋藤磯雄と同僚でありまして、いつも研究室で會ひまして尊敬してをりました。齋藤磯雄の『ヴィリエ・ド・リラダン全集』の月報に、中村光夫が「齋藤氏は、もしボードレールが現代の日本に生れたならば生きたであらうやうに生きてゐる、と言つても過言ではない」と書いてゐます。これは當時の私からすれば大變ことであつて、「ボードレールが現代の日本に生れたならば、齋藤磯雄のやうに生きるしかなかつただらう」と言つてゐることです。

それと、齋藤磯雄さんが大變好きなのは、銅版畫家の長谷川潔と深い交流があつたからです。長谷川潔は、若いときから長くパリに住んでパリで死んだのですが、パリに行くたびに會つて交流を深めたのです。長谷川潔の畫が好きなのです。ただ、銅版畫の長谷川潔なんかは、評論家の寺田透は厭だと言つてゐるのです。ああ言ふ風に生命感がなくて、餘りにも決つてゐて、凄く靜謐で、死んだやうな制作である、と。

私は齋藤磯雄さんは今でも尊敬してゐますけれども、少し批判的に見るやうになりました。その一つに、ボードレールやリラダンは十九世紀のパリに、直かに生きたのだらうけれども、齋藤磯雄は現代の日本に生きてゐないのではないかと思つたのです。ボードレールやリラダンが、十九世紀のパリといふものに本當に生で生きて、そこから詩をつくり、そこから『惡の華』をつくり、リラダンは『殘酷物語』をつくつたのだらうけれども、それの強い影響を受けてゐる齋藤磯雄は、現代の日本といふものに、ボードレールやリラダンだのやうに深く根差して生きてゐるのではなく、なにかボードレールやリラダンなどといふ杖をつい

て生きてゐるのではないかと、中村光夫の言葉を逆にとらへるやうな感覺がしたのです。

その感覺と、小林秀雄がランボー論の中で、ボードレールの『惡の華』を讀んでゐた中に、「この比類なく精巧に仕上げられた球體の中に、僕は蟲のやうに閉ぢこめられてゐた」と書いてゐます。私の場合も、大袈裟に言ふと、齋藤磯雄的な、反俗的な美意識に、何十歳も下の私が、同じやうに閉ぢ込められてゐたのです。小林さんは息苦しさを感じたと書いてゐます。その時に現はれたのがランボーなのです。ランボーによつて球體が壞されたのです。ここで小林さんはランボーと出會ひをするわけです。この感覺はなんとなくわかるのです。私は齋藤磯雄さんの球體に閉ぢ込められてゐれば、齋藤磯雄のエピゴーネンであり、二流三流のエピゴーネンで終つてゐるのです。私が、そこで出會つたのが內村鑑三だつたのです。

私は二年間連載いたしました「內村鑑三論」といふものを、三十七歳のときに本に出しました。「內村鑑三論」は「三田文學」といふ雜誌に連載いたしまして、その時に今の假名遣で書きました。この經緯についてある雜誌に書きましたらば、ある人から轉向者の如く批判されました。表面的に見ればさうですが、內實的にはさうではありません。內村鑑三といふ人の、人間と文章と思想といふものに出會つた時に、私は將に、現代の只中で、現代のくだらなさ、貧しさの只中で生きようと思ひました。

內村鑑三と出會つて、現代の貧しさを含めた中で我々は生きてゐるわけで、それに直かに生きて、その言葉の感覺で書かうと、かなり、意識したわけです。その自分の言葉で內村鑑三をどう書けるのか、現代の人間の心にどう屆けられるかを、大變意識して書いたのです。それ以來、かなづかひは今のやうに書くことになつたわけです。きちんとしたものではないのですが、これが、先程の說明です。內村鑑三に出會つて、齋藤磯雄的な、高踏主義的な美意識が壞れたわけです。そこから、現代のこの貧しさの中で、貧しい言葉の中で生きてゐる人間の意識に屆く言葉をどうするかで、ものを書いてゐるのです。一番の問題は、福田先生も言ふやうに、現代語をどう鍛へるかです。鍛へ方において、宗敎性であり、文語體の問題であり、sublime の問題であります。これが私の新字體、現代假名遣に對する辯明であります。

同じ「國語國字」第百九十號の中に「聖書に於る國語問題 その八」といふのがありまして、感心して拜讀しまし

たが、現代の口語譯聖書はどうにもならないけれども、明治の文語譯聖書のはうがすばらしいとあり、現行の大正譯より明治の文語譯のはうがよいのだと書いてあります。この問題、大正六年の文語譯がよいといふのは通念ですが。今の口語譯、新共同譯は、ある意味で論外でありますけれども、文語譯のはうは、芥川龍之介は、自殺する枕元に、大正譯ではなく、明治の文語譯聖書を置いてゐたのですが、聖書の飜譯は大きな問題なので、考へてみたいと思ひます。

今、岩波文庫で出してゐる聖書は、一般人が聖書を讀まうとすると、この福音書を手にとるであらうと思はれます。あれは塚本虎二といふ人が譯してゐる口語譯です。塚本虎二は内村鑑三の重要な弟子でありまして、内村鑑三が死ぬ半年くらゐ前に破門された人物です。それまでは助手として働いてゐたのですが、塚本虎二の岩波文庫の後書に「飜譯の決心」といふことが書かれてをりまして、ここに日本語を鍛へるとか、現代語を鍛へるといふことの問題が出てくると思ひます。

塚本虎二は「昭和元年に内村先生から、現行譯、大正の文語譯は文章が優美すぎて弱いから、明治元譯の、明治二十年譯を臺本にして、二年ぐらゐで譯してみよとの話があつた。マタイの一章を譯して持つてゆくと、『これは大事業だ。あいにく新雜誌をはじめたばかりで…』といふことでお流れになつた。ただし、先生は、古典的澁みをもつた文語譯を理想とされた。私は、聖書の言語はコイネギリシア語にならつて口語譯でなければならぬと考へたので、意見が合はなかつた」と書いてゐます。「あいにく新雜誌を始めた」といふことは口實であつて、氣にくはなかつたのですね。

「で、かかるうちに神の準備は成つた。昭和四年に身邊に起つた異變（内村鑑三からの破門）は、あらゆる口實をもつて逃げようとする私を、到頭この仕事に追込んだ。でも、まだ出發の決心がつかずにゐた。するとある夜、お休みを言ひにきた、數へ年八つの娘に、マタイ傳第五章二十一節の文語譯を聞かせたところ、わからないと言ふので、口語に譯しながら讀むとよくわかると言つた。そのことが、私に自信を與へて、翌年の正月から私の個人雜誌「聖書知識」にガラテヤ人への手紙を譯して載せた。時に數へ年四十七歳」

ここで、「解る」と「解らない」の問題です。數へ年八つの娘に聖書なんて解る必要がないわけです。全然意味がないのです。解らなくてよいのです。何が解つたか。言葉の内容が、です。裁きが裁判所だつた、さういふやうなこ

とをもつて、解ると言つてゐるのです。

ここが口語譯の問題です。今の新口語譯は塚本虎二のときの口語譯よりもつと口語譯になつてをりますが、これは、今の日本人に對して數へ年八つの娘に解るやうに譯してゐるわけです。でも、聖書といふのは、パウロが言つてゐるやうに、「吾れらは、成人したる者の中にて、智慧を語る」で、隨つて大人の問題、しかも、打ち碎かれた大人の問題なのでありまして、「文語譯を讀んで解らないから口語譯を讀んで解る」といふのは、「聖書の意味が解る解らない」ことの根本的な問題がまさに「解」つてゐないのです。

現代の文章は「解る」といふことをベースに作られてゐる。しかし、どう考へたつて解らない事があるのです。それを解るやうに書くことは、重要な意味が抜けてゐるといふ感覺が無いといふことで、一番問題なわけです。カール・バルトといふプロテスタントの神學者が丁度同じやうなことを言つてゐまして、面白いことに自分の子供も出てきて、塚本の場合と重なつてをります。

「今日、しばしば、次のやうに言はれる。聖書釋義の課題とは、聖書がさまざまに語ることを、過去の言語から、現代の人間の言語へと飜譯することである、と。それは奇妙なことに、聖書が語ることの內容、意味、意圖は、比較的容易に檢證できる、從つて何らかの意味で既知のものとして前提できるとでも言ふかのごとくである。

そこで、主要な事柄は何らかの言語上の鍵を得て、自分の子供にどうやつて話さうか、聖書の言葉を解りやすくし、現代世界においても繰り返し得るやうなことだけでしかないやうなのである」。ここに、「文語譯は格調がある」とか、「口語譯は格調がない」といふ問題の以前に落ちてゐる問題がある。「解り易く書いてゐる」ことは、一番重要なことが書かれてゐないことであり、實の所、極論すると、「誤譯」であるのです。一番難しいことといふのは、傳はつてゐない表現なのです。表現によつて始めて內容は傳はるのでありまして、ただ格調がある言葉を使つてあれば、表現されるのではないのです。それを、ただ口語譯しても、抜けおちたまま、であります。正確に申しあげると、飜譯ではないのです。

この感覺で和歌とか俳句の文語作品を、安易に口語譯して、「解つたかの裝ひをしてゐる」のであつて、口語譯なんぞ入れる必要はないわけです。逆にまちがつてしまふわけです。この邊の、かうした、「解り易く傳へるといふ感覺」、これが普通となつてゐて、古典作品の大事な意味が傳はつ

てゐないのです。危機意識が薄れた、安易な口語譯をすることになつてゐるのです。

前にも述べましたやうに、日本語は言葉でありますれども、表現でもあることです。表現を格調高くすることが大切であつて、言葉單發を補修することとは違ふのです。現代語を鍛へる中で如何に表現を行ふか、究極は、文章とは何たるかの問題になります。文學とは、文章とは、言葉の藝術でありますから、「表現の危機意識」がなさすぎると思ひます。

私が自分のことを棚にあげて一番不滿に思ふのは、どうも經濟學者の人とか、政治學者の人とか、大學教授の人達が、文章に對する意識が低いのではないのかと思ひます。何か正確な情報や理論があつて、それを言葉に移してゆけばよいといふ感じで言葉を使つてゐる限りは、この意識が薄いのではないのかと思ひます。評論といふものは、政治評論であれ歴史評論であれ經濟評論であれ、明治、大正時代では、「硬文學」といはれてゐた。「軟文學」といふものは婦女子の讀むやうな類の小說、讀み物の類であるけれども、男子志あるものは、「硬文學」を讀むものでありました。硬文學には、漢詩漢文學があり史傳がある。山路愛山や德富蘇峰の評論がありました。彼らは硬文學を書いてゐたのであつて、經濟史を書いてゐるわけではないし、政治史を書いてゐるわけでもない、かういふ意識があつたのです。私は硬文學を復興させるべきだと大聲でありませんけれども、小聲で言つてゐるのです。

やはり、表現といふものは、檸檬をしぼるやうに、內面から出るやうに、表現されるものである。自分といふ檸檬の內面が何ものであるか、それを言葉で內面化されて表現されるものです。かやうな順序があると思つてをります。特に今日、新書ブームといふのがありまして、解りやすく物事を書くといふことは、人間知性の在り方として歴倒的に流行してをりまして、誰に對してでも解りやすく書いてゐなければいけないとなつてゐる。今日、解り難く書くことを考へなければまづいと思ふぐらゐに、人間が解りやすく物を考へるやうにしかなつてきてゐないといふことになります。解り易いことしか考へなくなつてゐる。

本來、論語にしても聖書にしても、「絕對的に難しい言葉」なのです。たとへば、コリント前書に、神の愚かは人よりも賢くとありますが、この內容は絕對的にむづかしいのです。解りやすくしやうがないのです。このとほりに言ふしかないのです。このとほりで、解る人しか解らないのです。

これを口語にしたところで解らない。さういふ言葉を解りやすく書かうとする惡しき啓蒙主義的の時代の中で、頑として守ることです。絶對に言葉はむづかしい。

神の愚かは、人よりも賢く、
神の弱きは、人よりも強ければなり。

これは絶對にむづかしく、まさに、成人しかわからない、大人しかわからない。ここのところを塚本虎二が、八歳の子供に對して、どうやつて言ひ、どうして解つたのか、聞いてみたいものです。確かに解りやすく譯せられるところはあるでせうが、非常に重要なところは、絶對的なパラドックスとして、究極的な逆説は解り易くなりやうがないのです。それが、「言語表現の究極的な姿」であつて、「言語表現の究極的な姿」を、絶えず意識して忘れないことです。それを失はなければ、いくら普通の人達や、週刊誌などが墮落した言葉を使つてゐようとも、日本語のすごさ、日本の傳統といふものは、心ある人によつて引繼がれてゆくわけであります。

私はラテン語のことを考へてしまふことがあります。ラテン語は大事だと思ひます。聞くところによりますと、經濟學者ケインズはハイスクールのときに、最も出來たのは、數學とラテン語だつたさうです。カール・シュミットは八十歳ごろに、頭がわるくなつてきて、ラテン語でものが考へられなくなつてきたと、ボヤいたさうです。友人の追悼文を書くわけですが、このときはラテン語で書いてゐます。彼らヨーロッパの知的エリートにとつては、ラテン語があつて、一般大衆は解らず、讀めませんが、ラテン語を軸として、一つの古里としてあつて、ドイツ語を書いてゐる、フランス語を書いてゐるわけです。

日本語の場合は、言文一致といふことで、口語文がかういふ風になつてしまつたわけです。福田先生がいふやうに、口語文が必要惡的になつて、今更口語文で書かないわけにはいかない、替へるわけにいかない。口語文は、どんどん今の喋り言葉になよつていきます。今日の小説のやうに、なよりまくつたことばが活字になつていきます。今日の社會生活が亂れて墮落すれば、どんどん喋りことばで喋り、今日の文章語たる口語文がどんどんなよつていつてしまふ。本來口語文といふ文章語であるべきものがです。となると、ラテン語的なイメージに向ひます。さうです、日本語の文語文といふのは、日本のラテン語なのだといふ事です。文語文をラテン語として保持してゆく。多くの人は、口語文を喋つてゐればよい。小説なんてものを讀んでゐれ

ばよい。さうでない、文章に對して意識的な人々は、格調が高い文語文、文語の筋が入つた文章を書いて行く事が必要です。江戸時代は、町人とかの戯作の讀み物がありましたが、武士は漢詩文を讀んでをりました。今日の格差社會ではありませんが、知的格差が開いてゆくことは時代の流れかもしれません。口語文が身體ごと沁みついてしまつた人に言つても解りやうもないわけです。やはり、言葉のことを、傳統のことを考へれば、ラテン語を保持してゆくことです。文語文こそ言葉の故郷なのです。

儀式的なものになると、文語文で書くわけです。カール・シュミットがラテン語で追悼文を書いた樣にです。決斷を語るには文語文なのです。さつきの觀艦式の挨拶は、口語文でだらだら語るのではなく、もう少し文語體の挨拶をおこなふべきですが、危機的な狀況でなければ文語文が生きてこないのです。

吉田滿の『戰艦大和ノ最期』で見られるやうに、危機的な狀況になつた時に物を書かうといふ場合に、本能的に出てきたのが文語體であつた。二十二歳の東大法學部の學生が、何故か書き出した瞬間文語體が出たといふことです。偶々、今、文語體がどうのとか言はれてをりますけれども、それは結果的に、今の日本が平和になつてゐるからです。惡く言ふわけではないが、もう少し日本が危機的な狀況になつてくる、または、個人の人生においても危機的な狀況が訪れてくるときには、もう少しリアルな面において文語體的なものが必要とされてこざるを得ないと思はれます。さういふ意味では、文語體のやうなリズムを蘇らせるやうな準備といふか、教養を若い人達も身につけておく必要が當然あると思ひます。今、二十三歳の若い人がアフガニスタンなどへ行つたとしても、吉田滿の『戰艦大和ノ最期』は書けません。絶對書けないやうな教養しか教育を受けてゐないわけです。仕樣が無いわけです。しかし、かやうな危機狀況は、いづれくることがあるのです。

今の小說に書かれてゐるやうな口語文は、「世界の危機」「人生の危機」に對抗することができるやうな「重み」を持つた言葉になつてゐないのです。これはもつと日本の大きな危機なわけです。日常會話とか戀愛がどうのかうのとかは語れるけれども、「パブリックな物」は語ることはできない。「パブリックな物」を語ることができないことが最も問題で、危機的な狀況であります。「藝術にとつても」及び「言葉にとつても」です。

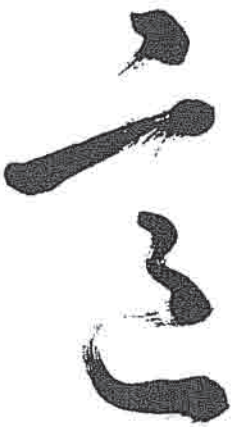
先程の、「觀艦式」でのコンサートで演奏される行進曲

は、全部昔の物です。軍艦マーチにしたつて、明治三十二年頃の作曲です。そして、信時潔は昭和十二年に「海ゆかば」を書くことによつて、戰前のパブリックなる追悼として、死に對して鎭魂する事ができたのです。今の音樂家、作曲家が、「パブリックなもの」を作れるかなのです。

例へば、假に現在平成二十年に親王が御生れになつたとして、信時潔ですと「祝典曲」を作つたわけなのです。當時、音樂學校の教授としての當然の役割として、天皇の誕生日とか何某記念とかでパブリックな式典音樂を作つてをります。今現在の藝術大學で作曲を教へてゐる先生が、平成二十年を記念して曲を作れるかです。平成何年かに、皇居の近くで流行歌手がピアノを演奏して捧げてゐました。あれを見て、がつかりしました。何故、クラシック音樂を教へてゐる藝術大學の教授が、ブラームスの大學祝典序曲のやうな曲を作曲して捧げないのか。

繪畫にしても、さうです。藤田嗣治が戰爭畫を描いた。信時潔にしても藤田嗣治にしても、戰後、あれに對する批判が色々とされた。それに對する恐怖感からかもしれないけれども、藝術家といふもの、文學者も含めてですが、公的な、パブリックなものに對して腰を引いてゐる。それで個人の內面だけを現代アートで描く、あるいは、小說で書くといふ風にプライベイトだけに收つてしまつてゐる。パブリックなものに對峙する言葉の力、音の力、色の力を持たなくなつてゐることが問題です。さやうな意味で、私が關係してゐる言葉といふものであれば、「小說」といふのは、これからどんどん、出版社が儲かりますから、どんどん出して、その時その時で話題作を作つてゆくと思ひますが、あれらはあれらで放つておけばよいものでありまして、大事な事は、パブリックなものに通ずるものを表現ができる言葉を、どう鍛へてゆくかといふことです。時代に迎合してもいけないが、やはり浮いてしまふのもいけない。そこの感覺が、表現する者の一番の惱みでもあるし、苦勞すべき點であると思つたりしてをります。

（しんぼ いうじ・文藝批評家）



京都懇話會　平成二十年六月二十一日於キャンパスプラザ京都

私と國語問題

早川　聞多

早川聞多と申します。國語問題協議會では三度目の話になります。一度目は學生時代(昭和四十九年)のことですが、當時學生で歴史的假名遣と正字を使つてゐるのは珍しいといふことと、父が評議員だつたこともあつて話をしたことがあります。二度目は、本會の『平成新選百人一首』が出たときに京都で講演會があり、小堀桂一郎先生と一緒に話をさせていただきました。今日は關西での初めての集りといふことですが、普段、歴史的假名遣をつかつてゐまして、周圍に同じ考への人がほとんどゐないことにいささか寂しさを覺えることがありましたが、今日はなにかホツとする氣持でお話させていただきます。

私は五十九歳になりますが、私の父は明治三十年の生れで、常に歴史的假名遣を用ゐてゐました。それと自分が習つてゐる假名遣と違ふことに、中學校のころに氣づいて、その理由を父に訊ねたのですが、その時の父の説明に私は當然の理があることに子供ながら氣づいたのでした。そして中學三年を終へた春休みに、二十日ばかりの間に父から手ほどきを受けて、歴史的假名遣を辭書をひきながらでも使つていくことも覺えました。

それから高校時代は學校の答案もなにもかも、歴史的假名遣と正字を通したのでしたが、周圍に同じ志の人がゐませんでしたので、孤獨と言へば孤獨でしたが、その意味合ひを自分で納得してゐましたから、不安などはまつたく覺えませんでした。

高校から大學にかけては、なにしろ七十年安保の頃で、日本の古いものは何でも悪いもので棄て去るべきものだとか、何事も政治的に右だ左だとみなして事足れりといつた雰圍氣が擴がつてゐましたから、「舊假名」を使つてゐるだけで、すぐに右翼だ反動だとみなされるやうな時代でした。さうした時代がしばらく續きましたが、ある頃からその流れが變はつたやうに感じました。私はやがて社會人になつて美術館に勤め、圖録や本の編輯をしたりしてゐて、出版社の人たちと附き合つてゐたのですが、假名遣については昭和五十年代後半頃から、「舊假名遣」なんてとんでもないといつた雰圍氣がうすくなつてきたことを肌で感じるやうになりました。今ではマスコミの記者でも若い記者

と話してゐると、隨分雰圍氣が變はつてきたといふことを感じます。一昨日もあるマスコミの記者に私が現在やつてゐる浮世繪の春畫の取材をうけたのですが、その取材の中でどういふ流れからか、歴史的假名遣や正字の話になりましたので、歴史的假名遣と現代假名遣では論理的に優劣はつきりしてゐると言ひますと、その記者はすぐに納得してくれました。歴史的假名遣に對する政治的なアレルギー反應がなくなつてきたことは確かなのですが、ではここで戰後の國語改革が誤つてゐたといふ反省にたつて、本來の歴史性を保つた國語の再建をはからうといふことになるかといふと、どうもまださうした雰圍氣にはなつてゐないやうに思はれます。現狀では、今更「歴史的假名遣」なんてといつた惰性的な雰圍氣が強いのと、文化論として論理的にもはや反論できなくなつてゐるにも拘はらず、國語改革を主導し容認してきた所謂インテリやその影響をうけた人たちが各方面に隱然と殘つてゐて、さうした再建の動きを抑へこまうとしてゐるやうに、私には感じられます。

さて、私は國際日本文化センターといふところに所屬してゐまして、外國の日本研究者と話す機會が多いのですが、そんな中でいろいろと日本の國語、またそれに關聯する話を聞くことがあります。例へば、東洋の佛教を研究してゐるフランス人の一人は、今年私が文字鏡研究會の協力を得て完成しました「古事類苑データベース」について、變な略字など使はず、原文のままの正字體であること、また假名遣も歴史的假名遣のままであること、その方が我々の研究に役立つと言つてゐました。

また中國の遼寧省出身の中堅の研究者と國語の問題を話したのですが、中國も事情は同じで、阿片戰爭に負けて以來、自國の文化は西歐に太刀打できないといふ氣持が強くあり、國語についても漢字を簡體字に、將來はローマ字化しようなどと考へた。それは日本の國語改革と同じ考へです。そして簡體字を二次、三次と進めたのですが、二次あたりでこれは駄目だと氣が付いた。このやうな文字では知的なことが教へられないと。とは言へ今となつては元に戻すに戻せない狀態になつたと言つてゐました。同じやうなことは韓國の研究者も言つてゐます。文字をすべてハングルにしてしまつたので、文化研究の將來に危機感を感じる。しかしそれを國の政策として決めたので、それに反するやうなことを言ふとひどいバッシングを受ける。東洋の文化研究には日本に來て漢字の文獻資料を見た方が格段と研究が進む。西洋のことを知るのにも、日本の飜譯を讀む方がよいと言つてゐます。

また二年ほど前にブラジルのサンパウロ大學に行つてきたのですが、そこで通譯の方と國語の話をしたことがあります。その通譯の方は私の原稿の假名遣が普通の日本の文章と違ふことについて質問されたのですが、私が歴史的假名遣について簡單に說明しますと、なるほどと諒解してくれました。そこで逆に私の方から、ブラジルの國語であるポルトガル語の綴りは、私から見ると英語などよりよほど發音どほりのやうに見えますがと質問したのですが、その通譯の方はポルトガル語でも日本の歴史的假名遣と似たやうに「歴史的綴字」をたくさん殘してゐると言つてゐました。

また、書き言葉として漢字假名混文のやうな言語は日本の特殊なことのやうに思つてきましたが、そのやうなことはないのであつて、例へば英文の中の多くの單語は、一々發音通りに讀んでゐるわけではなく、一續きの文字の塊として讀んでゐる。私は國際基督敎大學で英語の訓練を受けたことがあるのですが、あそこでは毎週分厚い本を何冊も讀んでくるやうに言はれ、一週間後に本の內容についてテストがあつたのですが、あれだけの文字數のものは一字一字を發音通りに讀んでゐてはとても速讀はできない。漢字假名混文のやうに單語や熟語を一つの塊として見ていかなければ讀み切れない。その時のアメリカの敎師もその通りだと言つてゐました。

國際基督敎大學では他にも面白い授業を受けました。それはいくつかの英文を發音記號だけで記したものを、元の英文に直せといふテストでした。それはなかなか難しいものでしたが、その時私は不思議な思ひを覺えました。それは進んだ歐米の言語はアルファベット二十六文字だけで發音通りに記してゐるので、日本語に比べて言葉の學習に苦勞がないといふ、今から思ふと何とも能天氣な言說ですが、さうした言說が何の根據もないことを思ひ知らされたのでした。思へば戰後といはず、明治以後の私たち日本人は、何と不確かな西歐崇拜の言說に劣等感を抱かされてきたことでせうか。

文字で高度な知的活動をしようとする所では、表面的な形は異つてゐるやうに見えながら、その基本的なところではそれほど違つてはゐないのではないか。明治以降、日本では平かな、カタカナ、漢字、そして漢字には音讀みと訓讀みがありといつた、こんな複雜な文字を使つてゐるからだめなんだといふ自虐的な思ひ込みがあつたやうに思はれます。しかし廣く世界を見ますと、どこでもそれぞれの言語によつて同じやうな複雜な構造があるのであつて、何も

日本語だけが難しいのではないと考へます。それを明治以來、日本の所謂知識人たちは、生活スタイルを含めて文化の深いところまで人爲的に變へられるといつた、西洋近代の操作主義に盲目的に倣つて來たやうに思へてなりません。

最後にひとつ提案なんですが、若い人が獨學で歴史的假名遣を身につける道を、本會で用意してはどうかと思ひます。例へば、前に協議會で出された山田孝雄先生監修の『假名遣ちかみち』とか『平成疑問假名遣』を元にして、本會のホウムペイジにドリル形式のやうな學習プログラムを設けてはどうかと考へます。そのコースを一應修了すれば、歴史的假名遣が一通り習得出來るといふやうなものが出來たらいいだらうと思ひます。

（はやかは もんた・國際日本文化センター教授、本會理事）

追悼　萩野貞樹さんを想ふ

桶谷　秀昭

萩野貞樹さんが國語問題協議會の理事の方二名と、如水會館のロビイに私を訪ねてこられたのは、ずゐぶん以前のことのやうに感じてゐたが、あらためてかぞへてみると、七、八年前に過ぎなかつた。

當時、私はまだ大學の教師をやめてゐなかつた。いはゆる大綱化にともなふ組織の變更があつて、それまで所屬してゐた教養課程の人文科學といふ學科が廢止になり、日本文學文化といふへんな名稱の學科に配屬されて、なんとも居心地がわるく、やめたかつたのであるが、文部科學省との約束事で、やめられないといふことであつた。

たまたま誘つてくれる人があつて、母校の校友會雜誌の編輯委員になつて、氣晴らしにもなるかと思つて、毎月一度、一ツ橋の如水會館に通つてゐた。その日も、編輯會議があつて、萩野さんたちが如水會館にみえたのだと思ふ。

一階の食堂で茶を飲んで、すこし話をした。あらたまつたことは何もいふ必要がないのである。萩野さんとは初對面であつた。大學が同窓であることは知つてゐたが、學部がちがひ、在學期間もちがふ。接點があるとすれば、正漢字、歴史的かなづかひの保守といふ一點で、これはたいへん貴重な接點であるが、いまさらあらたまつてそれをいふ必要がない。それに萩野さんは、私とおなじやうに、やや人みしりをする性質らしかつた。

この初對面の印象は、あとになつてもかはることがなかつた。それは含羞といふ情操であり、太宰治の死後、時がたつにつれて、日本人からだんだんと消えていつたやうに思はれる。

そんな次第で、私は國語問題協議會に入會することになつたが、その後しばらくの間、空白の時間があつたことを、殘念に思つてゐる。どうしてそんなことになつたのか、いまもつてよくわからないが、何か事務上の手ちがひがあつたらしい。

これは私の方にも怠慢があつて、もともと無精者だから、連絡がなければないで、積極的に問ひ合はすことをしなかつたのである。

そのせゐで、私は會員になりながら、また理事でありながら、會合に出ることもすくなく、萩野さんと顔を合はせる機會もほとんどなかつた。

しかし時がたつにつれて、酒席で言葉を交はす機會が重なるやうになつた。萩野さんは秋田の出身らしく酒はつよさうだつたが、酒品はきはめてよかつた。煙草もよく吸つてゐたが、吸ひ方が何となく身ぎれいで、これなら當節、增えた嫌煙者にも迷惑はかけないやうに思はれた。

國語問題協議會は理事會のあとで、二次會をやる癖がある。だれがいひだすともなく、自然にさうなるのだが、これは惡くない習癖である。私はつい最近まで、ある文學研究の學會の會長をやつてゐたが、年二回の總會のあとでかならず懇親會がある。これが億劫だつた。懇親會といふが、實は一つの固定したズィッテになつてゐて席まで決まつてゐる。つまらないから、やめろとは役目上いへず、つきあつてゐたが、さういふことが協議會にはないからいい。

去年の晩秋だつた。私は協議會の古參會員である萩野さんの意見を聞きたい案件が一つあつて、理事會のあとで、有樂町の交通會館の地下の蕎麥屋に入つた。要事が濟んでからすこしながい時間、雜談をした。若い受驗生の頃のこと、今のこと、雜談は、いまと過去とを行きつ戻りつして、とりとめがなかつたが、たしかなことは、人間の生涯の地平線が感觸できる年齢に、お互ひが達してゐることだつた。

萩野さんは法學部を出て、國語學者になつた。私は社會學部といふところを出て、社會科學をやらずに文藝の批評をするやうになつた。だからどうしたといふのか。

蕎麥屋の主人が、ビールばかり飲んで蕎麥の注文を一向にしさうにないこちらの方を、不審げにみてゐた。

萩野さんのビールを飲むテムポは、いつもより速いやうにみえた。

「生きることにこころ急き……」——プーシキン『オネーギン』の有名な詩句を借りて、あの夜の萩野さんの何か心急ぐ仕度の雰圍氣を思ひだすのである。

私はこの日、萩野さんから手渡しでいただいた文春新書の『舊漢字』を家へ歸つてからさつそく讀んで、感想を手紙に書いた。この新著のサブタイトルに「書いて、覺えて、樂しめて」とあるのが、いかにも萩野さんらしい心遣ひである。讀者になるたけ負擔をかけないやうにといふ奉仕の精神は、妥協を拒否する精神とひとつであり、精神の身錢を切つた仕事ぶりになつた。無私の精神がなければ、かういふ仕事はできないのである。

『ほんとうの敬語』は名著であり、よく賣れてゐる本である。私が以前勤めてゐた大學の教へ子が、いま近代日本文學と日本語の講義を擔當してゐて、『ほんとうの敬語』を毎年、教科書に使つてゐるといふ。アジアの各地から來

た留學生が、日本語の習得でいちばんむづかしいのは敬語だといふ。萩野さんの本が、留學生の要望に實によく應へてゐるのである。

「ハギノ式敬語しくみ圖」といふユニークな獨創は、留學生のみならず日本人學生にもたいへん役立つてゐるにちがひない。しかし、この見事な創意工夫による圖式が、圖式に留まつてゐないのは、この本の基底に埋められてゐるひとつの思想、敬語は日本語の運命である、といふ深いメッセージによるのである。

あの夜を最後に、萩野さんは二度と姿をあらはさなかつた。萩野さんが前立腺の癌に罹つてゐることは、すでに當人の口から聞いてゐた。私は十三年前に家妻を癌で死なせたから、この病ひのつらさをよく知つてゐるつもりである。當人がいちばんつらいのはいふまでもないが、端の者もつらい。

昨年十二月十一日の夜、拓殖大學日本文化研究所主催の講演に行つたとき、前回の講演者が萩野さんだつたが缺席されたことを知り、病狀の惡化を心配しつつ、見舞狀を書くことも、見舞ひに行くこともできずに年が明けた。

今年三月二十一日の國語問題協議會の理事會に出席したとき、萩野さんが二月二十四日に苦しみながら死んだことを、事務局の谷田貝さんから聞いた。この日、小田村會長により一同默禱を捧げた。

四月二十二日のゆふべ、九段會館で、西尾幹二氏の司會による追悼會がおこなはれた。およそ百人の人が集まり、いい會だつた。

奥様から病狀經過の報告があり、一昨年、膀胱の檢査で發見された癌は初期のとるに足らぬものであつたが、ついでに前立腺を檢査したところ、すでに骨髓にひろがる惡性の癌が發見されたといふ。以來一年餘、癌は骨髓をめぐつて全身にひろがりつづけた。今年一月から二月の最期の日の直前まで、激痛がおそひ、病院の寢臺の手欄を固く握つて終日激痛に堪へてゐた。モルヒネは苦痛をやはらげるのにほとんど效果がなかつた。病院のモルヒネは底をついたといふ。しかし二月二十四日は朝から激痛が消え、安らかな眠りの中で死を迎へた。擔當の醫師は、立派な患者であつたと萩野さんを賞めたといふ。

癌は、病原菌が外から入つてきて惹起すほかの病氣とはちがふ。自己の身體組織の異變において發生し、自己增殖するのだから、この苦痛は自分とのたたかひであると、病床の苦しみにおいて萩野さんは洩らしたさうである。

そのストイックな壯烈な闘病姿勢は、國語學者としての

果敢な仕事振りに通じるものがある。

萩野さんは、戰後日本のねぢくれた空氣に抗して、しなやかな彈性ある心をもつて生き、そして死んだ。

（平成二十年六月二十五日）

（をけたに ひであき・文藝評論家、本會理事）

萩野貞樹先生と私

上田　博和

萩野貞樹先生が今年（平成二十年）二月二十四日に亡くなつた。享年七十である。

先生は昭和十四年生れ、學生のころから國語問題協議會に參加してをられた。私（昭和二十三年生れ）が國語問題に目覺めて『國語國字』を讀み始めたのは敎員になつてからで、すでに萩野先生はその執筆者であつた。

初めてお目にかかつたのは、昭和五十六年二月八日の荒魂之會『あらたま』第十號合評・活動報告會（三十二名・山の上ホテル）ではなかつたかと思ふ。その號に私は漢字の訓讀みの出題法に關する短い文章を載せてもらつたのだが、「漢字の讀みの出題に就てはいつも他の敎師と喧嘩になる。訓といふのは意味なのだといふ事を色々な機會に主張して行きたい」といふ萩野さんの發言が記錄[※1]に殘つてをり、そのあとの夕食會でも他の參加者とともに國語問題で話が彈んだ記憶がある。「福田恆存先生を圍む會」など荒魂之會主催の懇談會ではその後も何回か御一緒した。

＊

萩野さんの本は殆どを讀んだが、なかでも平成十三年の『みなさん これが敬語ですよ』（リヨン社）には壓倒された。まづ書名にびつくり、中を開けると「開口一番、立ち読みのみなさんへ」とあつて「たいして高くもないので買つていただきたいのですが、ただ、世間でよく話題になるたとえば「金魚に餌をあげる」などについて、あげる？　結構じゃないか、あれは言葉の当然の「変化」なんだよ、というような意見の人にはまったく無用の本ですから、どうぞ棚にお戻しください」といつた調子である。この語り口と見事な圖解による敬語論批判は痛快であつた。

通說は（謙讓語）を「動作の受手に對する話手の敬意」の表現（＝受手尊敬說）と規定してゐて、高等學校の教科書も受驗參考書の殆ども大學の入學試驗問題もみな今でもこの立場である。これは誤りだと萩野さんは昔から主張してゐた。本書でも宇治拾遺物語の例を擧げて說明してゐる。

鬼ども「ここに翁參りて候」と申せば、（巻一）

これは、はるかに下賤の者どもである鬼の一匹が、その鬼からすれば上位者であるところの鬼の首領（かしら）に向かってものを言うことを「申す」と表現している場面です。話し手（源隆国）から見れば鬼の首領などははるかに下賤なものです。それでも「申す」と言っている。／学者たちの説によればこれは作者が鬼のかしらに敬意を表したものだというわけです。滑稽というしかありません。（二二〇―二二一頁）

萩野さん自身による紹介「現代の敬語の亂れが（ママ）、意外なことに主として教科書の記述や國語學者の論文が追認し、むしろ助長してゐる實態を多數例示して批判を加へてゐる。標題は、現在の教科書や學者の論文には從つてはならないことを含意したものであり、その敬語論は基本的に時枝理論に從ふ旨あとがきに言及がある」[注2]。その「あとがき」に曰く「敬語に関する時枝理論は六十年以上たったいまもいささかもゆらぎません。われわれ後進がなすべきことはただこの理論を推し進めることだけであると確信しています・・この本は、私の時枝先生へのあこがれと尊敬によって綴ったものにほかなりません」（二五五―二五六頁）

萩野さんは一橋大學に入學して最初に讀んだ學術書が時枝の『國語學原論』だつたといふし、若い頃『月刊文法』の懸賞で入選したのも時枝理論に基く敬語論であつた。のちに戴いたその論文「辻村敏樹氏の敬語說への疑問」は本書の原型といつてよい。私も（大學卒業後に三浦つとむを經由して）時枝言語學に出會ひ、その著書の一節に學んで

論文を書いたことがあるから、この記述には感動し「憧れと尊敬」といふ言葉も素直に受けとめることができた。

本書は好評で増刷を重ね（のちにPHP文庫に收錄）さらに『敬語のイロハ教えます』（リヨン社）『ほんとうの敬語』（PHP新書）と續いた。若き日の習作から研鑽を積み學術論文（勤務先の產能大學の紀要論文）を經て大衆的な著述三部作に結實した敬語論は萩野さんの第一の業績だと思ふ。

＊

平成九年の講演[※3]で萩野さんは自らの歷史的假名遣の授業を語つたが、平成十五年に大學を辭めてから出版した『旧かなを楽しむ』（リヨン社）について「新假名による和歌俳句・・が新假名であることによつて意味不明となる・・舊かなは分かりやすく便利である」[※4]と自ら紹介してゐる。「新かなは不便、舊かなは便利」は名言である。續篇『旧かなと親しむ』（リヨン社）を經た第三作『旧かなづかひで書く日本語』（幻冬舍新書）は、福田恆存『私の國語教室』よりも親しみやすい假名遣の入門書としてぜひとも手許に置きたい書物である。[※5]

＊

一昨年（平成十八年）十月の報道によつて文化審議會の「敬語の指針」案を知つた私は、翌月の國語問題協議會の講演會場で萩野さんとその話をし、その後その年の暮までに御自宅に數回電話し、翌年からメールをお送りした。萩野さんの御返事には「この問題は「永久戰爭」です」などとあつた。「敬語の指針」は昨年二月に答申が出たが、萩野さんの反對意見は答申前に朝日新聞[※6]に答申後に『Voice』[※7]にそれぞれ掲載された。文化廳から事前に意見を求められて提出した國語問題協議會としての意見書[※8]も萩野さんが書いた。私は文化審議會を傍聽するなどして「敬語の指針」を追跡し、その經過[※9]を報告すべく昨年二月の國語問題協議會の理事會に參加した。そののち私の身に病氣が發覺し、六月の理事會に參加したあと懇親會場に向ふ道すがらにそのことを話したとき、自分もさうだと萩野さんが語つたのには本當に驚いた。萩野さんは翌七月の理事會まで出席し盛んに發言してをられた（理事會で私が同席したのは三回である）。昨年八月に私が退院したことをメールで御報告するとすぐ「よいかな、おめでたう」と御返事があつたのが最後になつてしまつた。亡くなる直前に『敬語のイロハ教えます』のはじめの三章を獨立させた『敬語の基本教えます』（リヨン社）が出たが、その「あとがき」が萩野さんの最後の執筆であらうか。お元氣ならこれから

も立派な御仕事をなさつたはずで、訃報はまことに無念である。心から哀悼の意を表する。

註

＊1 荒魂之會『會報あらたま』二三號（昭和五十六年四月）

＊2 『國語問題協議會四十五年史』平成十八年三月　一三〇頁

＊3 萩野貞樹「歴史的假名遣と若者たち」『國語國字』百六十九號（平成九年九月）

＊4 『國語問題協議會四十五年史』平成十八年三月　一三二頁

＊5 拙稿「書評『旧かなづかひで書く日本語』」『國語國字』百八十九號（平成十九年十二月）

＊6 萩野貞樹「（敬語指針）「美化語」新設に疑義あり」『朝日新聞』平成十八年十二月二日朝刊「私の視点」欄

＊7 萩野貞樹「文化庁は敬語に口出しするな」『Voice』平成十九年五月號　のちに改題して『國語國字』百八十八號（平成十九年七月）に轉載

＊8 國語問題協議會「「敬語の指針」に關する意見」平成十八年十一月「國語問題協議會」ウェブサイトに轉載

＊9 拙稿「「敬語の指針」の自敬表現」『會報あらたま』一三三号（平成二十年十月）

追記

四月二十二日の追悼記念會で配布された著書目録は有益である。論文を含んだ著述の總目録を切望する。

（うへだ ひろかず・本會評議員）

萩野貞樹『旧かなづかひで書く日本語』誤植（上田博和）

二七頁終行　未然形　↓　**未然形**

二八頁　「**將然言**」↓「將然言」

三一頁　i u u e eを waのaの下の行に寄せる

三四頁　扱って　↓　扱つて

六五頁　改変されていますから　↓　改変されてゐますから

七七頁　いったい　↓　いつたい

九六頁　変った　↓　変つた

一三五頁　組み合わせた　↓　組み合はせた

一八七頁　。。　↓　。

二二八頁　たった　↓　たつた

本文小見出しと巻末「著者略歴」　「八」　↓　「ハ」

言葉の雜學（十二）

鹽原　經央

【まうでる】現代語として「詣でる」はやや古めかしい響きがあるが、「初詣で」などは普通に使はれる。『岩波古語辭典』に「マヰ（參）デ（出）の轉」とある。ヰがウに轉じたウ音便なので、歷史的假名遣はマウデル。マヰは宮廷や神佛など高貴な所に參上する意。

【まづ】ある時間軸を輪切りにした時間の〝最初に、第一に〟の意に使はれる副詞。語形が似てゐる「まだ」も時間の流れの中で用ゐられる副詞なので、雙方がダ行の母音交代によつて造語されたのだつたら面白いが、どうもその證據は見つからない。が、假名遣はヅ。

【まづしい】『字訓』に「『貧（マヂ）と同根の語」とあるマヂは『日本國語大辭典』に「御巫本日本紀私記」から「貧窮〈末知（マチ）〉」の引用がある。チと同根ならズの音は出てこない。ついでに、〝うまくない〟意のマヅイも『大言海』は、貧しいに通じるかとする。

【まどゐ】團欒（だんらん）の意の和語。山家集に「水の音にあつさ忘るるまとゐかな梢（こずゑ）のせみの聲もまぎれて」とあるやうに、まとゐとも。まどか（圓）のマド、ヰは居の意。故に正しい假名遣は「まどゐ」。かういふ美しい言葉はいつまでも殘したいもの。

【まゐる】『岩波古語辭典』によると連用形だけが殘り活用が不明の動詞「參ゐ」に「入る」が付いて縮約した語である。『字訓』に吉田金彥の「目居（まゐ）る」說が載る。神聖な所、尊貴の人の所に參上するのだから「お目通り」の意でまゐるの假名遣も合點が行く。

【まをす】モウスの原形の「申す」はマヲスの語形だつた。『大言海』に、間または兩（ま）＋食（を）すである旨が書かれ、「間ハ、上二向ヒテハ、奏ノ意、下二向ヒテハ、命ノ意」とある。「食す」は政治を執行する意で、假名遣はヲスである。後世、言フの謙讓語に。

【みさを】操の假名遣はミサヲ。福田恆存は『私の國語教室』で疑義を呈してゐるが、『岩波古語辭典』は「ミは神・靈を示す接頭語。サヲはアヲ（青）に同じ」とし、神祕的な青さが原義で轉じて「常綠樹のような不變の美、また、狀況に左右されない志操」とする。

【みそぢ】二十歳のことをハタチといふが、ハタはフタの母音交代形で二十の意である。三十以上はミソ、ヨソ、イソ、ムソ・・・の語形になるミソヂを三十路と書くが、路は當て字で、ハタチのチと同じく數詞に付く接尾語。かつてはミソチと清音だつた。故に假名遣はヂに。

【みづ】水の歷史的假名遣はヅ。白川靜氏は『字訓』において「『みづみづし』『みどり』などと、あるいは關係があるかも知れない」と示唆してゐる。後世「水のしたたるやうないい女」といふがごとく、水と、若葉のもえ立つ綠のみづみづしさには連想が結びつく。

【みづから】「『身（み）つから』の變化したもので、『つ』は助詞、『から』はそれ自體の意」と『日本國語大辭典』にある。類似した構造のテヅカラやオノヅカラのヅも、この連體格助詞「つ」が濁音化したものと考へられる。歷史的假名遣ではそれぞれヅを用ゐる。

【みみづく】ミミヅク、コノハヅク、アオバヅクなどのヅクは古くはツクと清音だつた。『小學館古語大辭典』に和名抄の「木兔　都久　或云美美都久」の引用が載る。ツクが濁つたのだから、假名遣はヅク。ミミヅクはフクロフの一種で、毛の角が耳のやうに見える。

【みよう】「映畫を見よう」の見ヨウは文語の見ムからの變化。この種の上一段動詞に付く推量・意志の助動詞ムは、今はヨウに變じてゐる。これは歷史的假名遣でもヨウ。一方、「見樣見眞似」のヨウの類はムで置き換へられず「樣」の字音によつて「やう」と書く。

【みを】澪・水脈・水尾などと書かれるミヲは〝水が流れ

てゆく筋〟の意だから、形狀的には尾や峰を指す「を」に似る。『大辭林』は「『水の緒』の意」としてゐる。尾であれ緒であれ、歷史的假名遣はヲ。故にミヲ。なほ、サオがサヲなのは刺すミヲとの說もある。

【むいか】六日は和語で「むいか」と言ふが、「むゆか」からの變化なので、ヤ行の母音交代といふことになり、歷史的假名遣でも「い」を用ゐることになる。「む」は「み（三）」の母音交代で六は三の倍數。ふた（二）・ひと（一）、や（八）・よ（四）も同じ關係。

【めうが】ミョウガ（茗荷）の歷史的假名遣はメウガ。「茗」は元來、茶を意味する漢字で、しかも字音假名遣はミヤウだから、ミョウガを茗荷と書くのは當て字である。『大辭林』に「芽香（めか）の轉という」との補注あり。その長音化ならメウガで合點が行かう。

【めづらしい】「メ（目）ツラシ（連）の意。見ることを連ねたいというのが原義」と『岩波古語辭典』。だが『小學館古語大辭典』の語誌は「動詞『め（愛）づ』から派生した語であろう。賞美すべき價値があると思わせるような狀態が原義」。いづれでも假名遣はヅ。

【もう】「もうだめだ」「もう一人、手が必要だ」などと用ゐる副詞のモウは歷史的假名遣でもモウと書く。モハヤ（最早）のモが延びたものか。語中語尾でウと書くウ音について書いてきたが、ほかに「父さん」などがある程度。あとは大體フで書くと覺えればいい。

【もちゐる】平安期以後戰前に至るまで「用ふ」とハ行の假名遣の書物が多いが、『岩波古語辭典』は「モチ（持）ヰ（率）で、取り上げ、引きつれていく意」の注がある。「用ゐる」なら上一段、「用ふ」なら終止形以下の活用語尾がフ・フル・フレ・ヒヨと、上二段活用。

【もづく】海藻のモズクは酢の物にして食される。その歷史的假名遣はモヅク。漢字では「水雲」「海蘊」など書かれる。水雲はその形狀による文字遣であらう。し

かも、ミヅクモの音轉モヅクモの下略と考へると納得が行くが、さう説明する辭書は見當たらない。

【もとゐ】「國の基」など「基」をモトイと訓じるのは「本居」の意なので、これも歴史的假名遣では「もとゐ」。間違つてしやべつてしまつたのを言ひ直すとき、モトイと言つてから訂正することがあるが、これは「元へ」がなまつたもので正假名遣でも「もとい」。

【もみぢ】常用漢字表付表に「紅葉」が掲げられるが「黄葉」はない。また現代では名詞にのみ用ゐるが、古くは動詞にも用ゐられた。萬葉集には「もみつ」と活用語尾が清音で四段に活用した例がある。平安時代に濁音化して、活用も上二段に。だから、假名遣はヂ。

【やいば】刃を「やいば」といふのは「燒き刃」のイ音便。ついたち（一日）は「月立ち」のイ音便。衝立（ついたて）も「衝き立て」から。キ（ギ）→イの音便によつて正假名遣でも「い」と書く語は、ほかに、垣間見る・ついで（序、次）・就いて・ついばむなどがある。

【やうか】八日の歴史的假名遣はヤウカ。八はヤで四のヨの母音交代形。カはフツカ、ミッカ、ヨッカのカで日を數へるときの呼び方である。ヤカのヤが長音化してヨーとなつたので、ヤウカとなる。ミッカ、ヨッカは長音化でなく促音化したと考へられる。

【やうやく】〝だんだん、徐々に、やつと〟の意のヨウヤクは「ヤヤク（稍）の轉。ヤクヤクの音便形ともいう」、同意語のヨウヨウは「ヤヤ（稍）の轉。ヤウヤク（漸）の音便形ともいう」と『岩波古語辭典』にある。だから、歴史的假名遣はヤウヤク、ヤウヤウに。

聖書に於る國語問題（その九）

―爾曹は我を言て誰とする乎―

松岡　隆範

今回はマタイ傳十六章十三節から二十節迄の一段の中の問題點に就て述べる。

此の段落は英語の聖書では The Great Confession 又は Peter's declaration about Jesus といふ小見出しが付いてゐて、マタイ傳の中でも重要な一段である。

先づ文語版、大正改譯から引用する。

十三イエス、ピリポ・カイザリヤの地方にいたり、弟子たちに問ひて言ひたまふ『人々は人の子を誰と言ふか』十四彼等いふ『或人はバプテスマのヨハネ、或人はエリヤ、或人はエレミヤ、また預言者の一人』十五彼らに言ひたまふ『なんぢらは我を誰と言ふか』十六シモン・ペテロ答へて言ふ『なんぢはキリスト、活ける神の子なり』十七イエス答へて言ひ給ふ『バルヨナ・シモン、汝は幸福なり、汝に之を示したるは血肉にあらず、天にいます我が父なり。十八我はまた汝に告ぐ、汝はペテロなり、我この磐の上に我が教會を建てん、黄泉の門はこれに勝たざるべし。十九われ天國の鍵を汝に與へん、凡そ汝が地にて縛ぐ所は、天にても縛ぎ、地にて解く所は天にても解くなり』二十爰にイエス己がキリストなる事を誰にも告ぐなと弟子たちを戒め給へり。

此處でイエスは先づ『人々は人の子を誰と言ふか』と問ひ給うた。そして次に『なんぢらは我を誰と言ふか』と問ひ給うた。最初の問は「人々は」と言ふのであるから穏やかな問である。然し二番目は「なんぢらは」と言ふのであるから此れは鋭い問ひ質しである。第一の質問とは違ふ。語氣の強さがある筈である。右に引用した大正改譯では此の語氣の違ひは全く表れてゐない。

そこで欽定英譯聖書（千六百十一年）を見てみよう。

13 When Jesus came into the coasts of Cæsarea Philippi, he asked his disciples, saying, Whom do men say that I the Son of man am?

14 And they said, Some say that thou art John the

Baptist: some, Elias; and others, Jeremias, or one of the prophets.

15 He saith unto them, But whom say ye that I am?

欽定英譯では第一の質問に do が使はれてをり、第二の質問に do は使はれてゐない。

欽定英譯聖書の英語は十六世紀の英語である。此の時代、疑問文は只 say ye の如く倒置するだけでの形が普通であつた。do を使ふのは一種の迂言法であつてやや穏かになるのである。

第二の質問に do は使はず、普通の倒置法であり、しかも文頭に but が付いてゐる。

此處に明らかに第一の質問よりは強い語氣が感ぜられるのである。

欽定英譯で此處を讀んだ時、語氣の違ひが表されてゐると感じたので、私は英語史の本で、十六世紀に於る疑問文、疑問文に於る do の使ひ方を調べた。そして欽定譯聖書の此の處で do は一種の迂言法の性質を持つことを知つた。

然し現代英語では疑問文には普通 do を使ふのであるから do を使ふか使はないかによつて語氣の違ひを表すことは出來ない。

現代英語による聖書の色々の version を調べてみると、第二の質問の頭に先づ But you, として who do you say that I am? とする等、but を使つたものが殆どである。"What about you?" "Who do you say I am?" he asked them. としたものもある。

とにかく英語の聖書ではどれも第一の問と第二の問との語氣の違ひをハツキリ表さうとしてゐるのである。

日本の文語版大正改譯ではその配慮が全く無い。これでは駄目である。

此處でヘボン等による明治元譯を見よう。元譯では第一の質問を「人々は人の子を誰と言ふや」とし、第二の質問を「爾曹は我を言て誰とする乎」として語氣の違ひを明瞭に表してゐる。

此處でブリッジマン、カルバアトソンによる漢譯聖書を見よう。

第一の質問を「我ハ人之子也人言テ爲スレ誰ト。」

第二の質問を「惟爾言テレ我ヲ爲スレ誰ト。」としてゐる。

「惟」は唯と同字でコレ、タダの意で此處では強意であり、しかも「我を言ひて誰と爲す」となつてゐる。漢譯でも語氣の違ひをハツキリと表してゐるのである。

ヘボンは欽定英譯に於る語氣の違ひの表し方を明瞭に意識してをり、漢譯をも參考にして「爾曹は我を言て誰とする乎」といふ強い形にして見事に譯しおほせてゐるのである。

十三節から二十節迄を明治元譯によつて次に示す。

十三イエスカイザリヤピリピの方に致しとき其弟子に問て曰けるは人々は人の子を誰と言や十四彼等いひけるは或人はバプテスマのヨハネ或人はエリヤ或人はエレミヤまた預言者の一人なりと言り十五彼等に曰けるは爾曹は我を言て誰とする乎十六シモンペテロ答けるは爾はキリスト活神の子なり十七イエス答て彼に曰けるはヨナの子シモン爾は福なり蓋血肉なんぢに示せるに非ず天に在す吾父なり十八我また爾に告ん爾はペテロなり我が教會をこの磐の上に建べし陰府の門は之に勝べからず十九又われ天國の鑰を爾に予ん爾が地に於て繫ことは天に於ても繫なんぢが地に於て釋ことは天に於ても釋べし二十遂に其弟子を戒めけるは我をキリストと人に告ること勿れ

次稿では更に「人の子」と言ふ言葉に就て、又ペテロの信仰表白に就ての問題點に就て述べる。

（平成二十年十月記）

（まつをか たかのり・彫刻家、元造幣局工藝管理官、本會理事）

契沖と悉曇（その三）

谷田貝　常夫

論證の仕方

「勢語臆斷」は、〈伊勢物語についての自分なりの勝手な注釋〉と契沖がへりくだつて名付けた書であるが、內心では自信があつたに違ひない、中々に洞察力に富んだ獨自の解說が多い。その臆斷の一つ、「業平の朝臣のいまはの言の葉」につき、死に臨んできれいごとを歌に詠んだりする者はよくゐるが『まことしからずしていとにくし』と契沖が難じたことに、本居宣長は餘程感じ入つたやうで、「ほうしのことばにもにず、いといとたふとし、やまとだましひなる人は、法師ながらかくこそ有けれ、から心なる神道者哥學者、まさにかうはいはんや。契沖法師は、よの人にまことを敎へ、神道者哥學者は、いつはりをぞをしふなる」と玉勝間で絕讚してゐるが、この二人ながらに、透徹した精神の持ち主であることを知る。

〈勢語臆斷　上之上〉

一　古今集序云。ありはらのなりひらはその心あまりてことはたらす。しほめる花の色なくてにほひのこれるかことし。

一　三代實錄云。業平體貌閑麗　放縱不拘略無才學善作和歌云々。一部のうち此四句を以て見るへし。史傳に善作和歌といへる事、只業平一人なり。尤高名也。

一　土佐日記はわつかなる一卷なるに、業平の事を引ける事三所見たり。貫之のしたはれたる事知ぬべし。貫之のしたはれたるは天下の歌人のしたへるなり。あらずや。

天下の歌人が紀貫之を慕つてゐるが、その貫之が在原業平を慕つてゐるのだから、我々も伊勢物語を尊重すべきだと契沖は主張し、業平の歌業のすぐれてゐることを示すのに、三册の書をもつてしてゐる。論法の一典型といへるもので、ここに契沖の言ふ「引證」乃至「文證」の好例が見られる。

抑も自分の考へを人に納得させるには、情に訴へる方法もあるが、情には個人差があつて確實性に缺ける。やはり萬人を諾なはせ、普遍的理解に至らせるには言葉による論

理の行使が最善である。日本には萬葉の昔から「問答」なる形式が存在し、中世に花傳書などで「問答ふ」なるハ行四段の和語が生れたり、和歌一首も上の句で問掛けて下の句で答へるものだとする人もゐるほどに問答がとりあげられたが、これは文藝の形式であつて、言葉のやりとりに終り、物事を解決するものではなかつた。しかし萬葉集成立の同時代には佛教が政界に影響を及ぼすほどに盛行してをり、その南都六宗では、各宗派の間で自派の優劣を論じる「問答」がしきりに行はれてゐたと推測される。佛教存立の基本にもかかはる大事であつたはずである。時代は大分降り、他國のことではあるが、その間の類似する事情は、河口慧海の「チベット旅行記」第六十八回に生き生きと描かれてゐるので、理解の助けとはならう。「その問答は我が國の禪宗のやうな遣り方とは全く違つて居るです。それは餘程面白い。また非常に活潑である。甚しきは他から見ますとほとんど彼は喧嘩をして居るのではなからうかと見らるる程一生懸命にやつて居るです・・・すなはち宇宙間如實の眞法において論ずといふので、それから問答を始めるです。」

平安時代初期には、最澄、空海が共に短期ながら唐留學を終へ、最新の佛教である密教をたづさへて歸朝し新しい宗派を開く。學問分野の分類による、今で言へば學部別であつたそれまでの宗派とは異り、教祖を頂點とした組織としての、新しい經典に依據した新興宗教が生れたのだ。嵯峨天皇の弘仁期には、清涼殿において顯教と密教との間で宗論をたたかはせたこともあり、「八宗論議」なるものが行はれたとも傳へられる。南都六宗の三論（空、中道を說く）・法相（唯識派）・成實・倶舍（存在論）・律・華嚴に加へ、天台宗と眞言宗が、それぞれ自宗の優位に立つゆゑんを討論により證明せんとしたといふ。

他宗派の相手を、殊に中間の立場をとられるべき天皇までをも說得させるには論理を用ゐなければならないし、その爲に一種の論爭の道具といへる「證」が必要であつた。證となる佛典の適切なる箇所を引いて、それに自分に有利となる解釋を加へることで相手を納得させるのだ。このやうな宗論において「證」を用ゐたことが明示できるのは、現在まで殘されてゐる空海の著作類である。

・二に體義を釋するにまた二つあり。初には證を引き、後には文を釋す。

・初に引證とは、問うていはく、今いづれの經によつてかこの義を成立するや。答ふ、『大日經』に明鑒あるによる。（聲字實相義・勝又俊教編修）

・かくのごとくの文證一にあらず。上のごときは聲聞の人の所修所證なり。（祕密曼陀羅十住心論・同右）

高野山で學んでゐるのであるから、契沖がこれらの文章を當然讀んでゐたことは間違ひない。そこで己の「和字正濫鈔」を誹謗した書への反論の中で、證の必要を說く。

・佛法は佛の經によりて菩薩論を造る。後の人師、彼經論を證として注疏を造る。もし聖賢によらず、經論を證とせざれば、憶說妄談のみにして、人これを信ぜず。（和字正濫通妨抄）

・はゐ　蓖・・・蔓荊、はまはひ。然れば、和名、延喜式の文證、灰の假名の例證、はふ故に名つくる理證、現在なり。（同右）

契沖は佛學における「文證」「例證」「理證」を、國語學の方へずらせて使つたといへようか。經典經論で證據となしうる文を指す「文證」を、日本の古書で假名遣の證據となしうる文を指すものとした。「例證」はその具體例であり、よく「なずらへて知へし」といふ實證法を用ゐてゐる。「理證」は、（道）理に適つたことが證となるもので、契沖の場合は語源に遡つて類推されることを指してゐよう。

證據をあげて古文を眺め直してみたところ、假名の使ひ方に理が、法則性があることに契沖は氣が付く。それは悉曇梵字が整然と配列されてゐたことに擬へられたためであらう。

日本語の變化

最澄は南都の學僧達とも激しい論爭をしてゐるが、晩年は、その死にいたる數年、會津の學僧德一との間での論爭に明け暮れた。論理としての勝敗は、立脚點の食ひ違ひがあつて決着がついたとは言へないさうだが、最澄はこの論爭の中で己の信仰敎學の優位性を確信するに至つた。日本で論理の行使は、八宗論議の例も含め、奈良末平安初の佛敎の世界において熾んに行はれてゐたのである。

そしてその際の漢文使用や乎古止點の開發、漢文訓讀などに習熟するにつれて、日本語そのものが變化を遂げていく。鎌倉時代になると、「係結び」が消えてゆき、終止形が連體形と同じになつてくる。その理由としては、武家政治が始り、卽物的なものの考へ方が力を得てくることと、論理的な文が求められるやうになつたことが擧げられる。係結びを導く係助詞は文章の構造にあまり關はらないし、係結びがくるとそこで文の論理が中斷されることが多い。一方で格助詞の役割がはつきりとしはじめ、殊に主格を示

す助詞の「が」が多用されるやうになる。さらには文章の構造を一段と明確にする接續詞も發達してくる。つまり、情緒的な文より論理的な文章の方向へと日本語は變化を遂げて行くのである。

このやうな日本語の趨勢もあつて、江戸初期の梵學の世界には論理を驅使する僧が現はれる。澄禪、淨嚴、慈雲である。中でも淨嚴は『悉曇三密抄』といふ精緻な梵學の書を著したが、師からの相承と漢字を通してしか音がわからない梵字の學習から日本語の音圖を作り、その五十音圖を弟子であつた契沖が引繼いだことは既に述べた。淨嚴、澄禪は法隆寺の貝多羅葉（古代印度で木の葉や皮に經文を書いた。小野妹子將來説もある）を摸寫し、研究を積んで梵字の風格を正したと言はれる。契沖は日本の古文を讀んでゐる中から規則性を發見したが、その氣づきも梵學の素養から來たもので、廣い觀點からすれば、日本語が論理的な方向に向つて行くその延長上に現はれた人物だとも言ひ得るであらう。

（やたがひ　つねを・本會事務局長、元普連土學園教頭）

縱書きの意識と感覺

――右から左へ進む文化――

若井　勳夫

時の流れは右から左へ

試みに一本の斜線を引くとすれば、右上から左下へ、左上から右下へのどちらに引くだらうか。意識せず自然な動きなら前者が多いだらう。これは右利きの者が多いことも關聯しようが、もつと根本的な要因があるのではないか。

歷史年表は縱書きが一般的で、右から左へと進んでゆく。江戸時代初期まで暦は一枚紙で卷物のやうに卷かれてゐて、卷暦といつた。「光陰の矢尻きりきり卷暦」「そろそろと軸にちかよる卷暦」と川柳で詠まれたやうに、一年は右から左へと進行して盡きてゆくと受け止められてゐた。學校や會社の月開豫定表、時間割も本來は右始まりであつた。時の推移、進行を線で表すなら、右から左への一直線であり、また、四季が循環すると捉へるなら、東の方向に春を置き、時計回り（右回り）に夏から秋へ、北の方向に冬を置く、圓の形がイメージされよう。

ところが、時の觀念、感覺が徐々に怪しくなり、豫定

表を縱で左から始めたり、時間割で月曜日を左に置いたり、上から下へ横書きにする例さへ出てきた。これらはカレンダーや左開きの手帳の影響もあるだらう。また、昭和五十五年ごろから、經濟の分野で、「右肩上がり」は成長率などをグラフで數値を表すことから、時は左から右に進むと捉へられ出した。「V字回復」や「U字カーブ」も年代順の變化を示す。今のところ、統計の數字のグラフ化に限られてゐるが、家系圖の長幼順を左から始める例も見る。しかし、日本人の基本的な意識としては右から左に時が流れ、それが國語の縱書きと密接に繫がつてゐると思はれる。

左向きの文化

國產の自動車が廣告に出ると左に向いてゐる。自轉車や船もやはり右から左へと進む。日本人にとつてこの形が進みゆく感じを與へ、自然に目に入り、心地よい。飛行機は離陸する時は左下から右上が多いが、空を飛んでゐる一直線は右から左への方向である。人物の肖像畫も横向きであるなら左向きが多く、右向きはなぜか落ち着かず、時に特別な感じがする。新聞によく出るお詫びの會見は右向きが多い。何か譯ありげで、事故や悲しい事件の時もさうではないか。一方、外車の廣告は右向きがふつうで、それなりに特別な存在感を與へるのは日本人の感覺を逆手に取つてゐるのであらう。

このやうに、時も物も右から左へと進みゆくといふ感覺の據つてくる根源は何か。それは古來の繪卷物の描き方に基づいてゐるといはれる。以下、榊原悟『日本繪畫のあそび』によつて述べる。「四季花鳥圖屏風」は畫面に向かつて右隻を春夏、左隻を秋冬の景色に當てる。これは前述の歷史年表と同じく、時間は右から左へと推移してゆくといふ考へ方である。これが繪卷に適用され、右から左へと卷物が開かれ、展開する。繪卷は「本來瞬間的（靜止的）狀況の描寫に過ぎなかつた畫圖に時間性を封じ込めることを可能にさせた畫面形式」である。この「時間性を表現する際の原則は右から左」であり、「これに右から左へと連綿の筆を重ねる縱書き文字をも含めれば、おそらく我々の先祖たちの眼（視線）の動きが、右から左を基本にしていたことは疑いない」のである。さらに、この著者は「本來、日本語の書き方はこの縱書きこそが正しい書式だということを、くれぐれも忘れないでほしい」と願つてゐる。

ここで注意することは、時間も文字の書き方も目や手の動きに對應してゐることである。つまり、身體の動きや感覺に合致した自然で本源的な動きなのである。右から左へ

と進む時間感覺、文字感覺は日本人の生得的で本質的な身體感覺、リズム感覺に基づく。

繪卷物の見方として、この書によつて更に付け加へると、ある場面から左方向へ向ふ者は進みゆく、去りゆく者であり、この動きは「これを追う鑑賞者の視線に順じている」。一方、畫面の右方へ向ふ者はその場面にやつて來た、出現した印象を與へることになる。阿彌陀來迎圖では、左上から右下に降りて來る阿彌陀は淨土からこの世にお迎へにやつて來たのであり、これは「鑑賞者の右から左への視線と激しく交錯する」ことになり、來迎の印象をより效果的に強める。なほ例を擧げると、武士の戰ひは右に位置する者が戰ひを進め、左の者は受けてゐる。右に正統性、正義性があると考へられる。京都の傳統的な雛飾りは向つて右に內裏樣を置く。向つて右を上位とする觀念は落語でも見られる。上手は觀客より向つて右、下手は左で、登場する人物の身分も異なる。漫才はつっこみ役は上手、ぼけ役は下手である。右から書き始める縱書きはこのやうな長い歷史傳統を擔つてをり、日本文化の深い基底を成してゐたのである。

百人一首・紙幣・雙六など

前述した肖像畫の顏の向き方が小倉百人一首でどの樣になつてゐるか、三十年ほど前に購入した將軍堂製によると、後ろ向きの三枚と正面の一枚を除いて、左向きが四十一枚、右向きが三十三枚、體を左に向け右に振返りが十九枚、この逆が三枚であつた。豫想したほど左向きは多くなかつたが、振返りを加へると、左向きが六十枚、右向きが三十六枚で、有意差を保つて左向きが多いといへる。

次に、紙幣の肖像を調べると、一例を除いて右にあり、昔の大黑天、聖德太子、二宮尊德から現行に至るまで左向きである。ただ、五拾圓（高橋是清）、百圓（板垣退助）はやや左向きで正面に近い。左に置く例外は大正四年の拾圓（和氣淸麻呂）で、右側に護王神社の本殿があり、それに右向きの和氣公を左に配する。明治三十二年のは右に和氣公があり、左の拜殿を向く。裏面は猪が左に向けて橫飛びする。昭和に入つて元に戻つたのは何か理由があつたのだらう。

雙六の振出しは右から始り、左に進み、上方へ、そして右上に進み、眞中で上りとなる。この時計回り（右回り）は四國八十八ケ所の巡禮の道筋と一致し、阿波國から始り讚岐國で滿願する。集印帳や習字の手本帳、經本などの折

本は當然、右から折り、縦書きで順次左に開く。巻紙は半切紙の右紙が左紙の上になるやうに貼り繼いでいく。傳統的な家屋では引き戸、襖、障子、窓などまづ手前のものを右から左に引いて開ける。これがもし逆であれば體感的に不安定である。着物は向つて右側が前に來る着方で、この逆の左前は不吉とされてゐる。最初に右を意識し、行動するのは物事は右から始まるといふ感覺がもとになつてゐる。從つて、文字の書き方を右から始める縦書きはごく自然な書式であつたのである。

繪馬・見返り美人など

繪馬を神社・佛閣に奉納する習俗は上代からあつたが、ことに中世、武士が戰場に出る時、勝利を祈願して生きた馬の代りに馬の繪を描いて納めた。この馬は左向きである。そして、戰ひから還り神社に報謝する時は右向きの馬を描いて奉納した。この左馬はやはりこれから進んでゆくことを意味する（ちなみに、山形縣天童市の將棋駒の左馬は馬の字を逆さに書いたもので、繪馬とは關係ないが、福を招く商賣繁盛の守り物として重んじられてゐる）。

京都の禪林寺（永觀堂）の本堂に見返り阿彌陀像がある。永觀律師が須彌壇を廻つて念佛してゐると、阿彌陀様が臺座から降りてきて、共に廻られた。ためらふ永觀を振返つて「永觀、遲し」と聲を掛けたといふ傳へがある。前を歩む阿彌陀は體を左に向き、顔を右に向け、來迎圖のやうに慈悲深さが表れてゐる。また、菱川師宣の見返り美人も同じ構圖で、「ふり返りへの恐れが、美の觀念を生み、やがて美しいとだけ思わせるようになつた」のである。（中西進『古代日本人：心の宇宙』）。一方、物怪や幽靈は右向き、または右への振返りで「呪詛そのもの」として受け止められた。

縦書きは正格に立つ

「横書きの見慣れし丸文字この春は縦書きとなり結婚を告ぐ」（松坂かね子作。大岡信『新新折々のうた4』）—横書きに慣れた若い人でも結婚の挨拶狀ではきちつと身を正して縦書きを用ゐる。就職活動が始ると、學生は縦長の封筒と便箋を求め、希望する會社に合つた手紙を書き出す。普段、横に書き慣れてゐても、いざとなると改まつて縦書きで身を處す。横書きの多い學校や會社でも式典の案内や寄付の依頼、禮狀など公式の場合は縦に變へる。卒業證書も縦書きが正式といふ觀念は殘つてゐる。これは上來、述べてきた右から始める縦書きが正式、正格であるといふ意

識、態度がなほ生きてゐる證左であらう。

ここで、「たて」の語源、原義を探ると「たて」は動詞「たつ」（立・建）の母音交代による語で、「直立性の方向量をもつ義」（森重敏）で、眞直ぐに立つことを表し、同時に、ゆくといふ「直進性と同質」である。從つて、我々は縦に立ち、そのまま進んでゆく。その表れの一面が時であり、書式なのである。（ちなみに、「よこ」は「よく」（避）と同源で、「向うからの方向量に對して、正面に受けずに避くる方向、場所」を示す）。このやうに、言葉としての「たて」は日本人の時間觀念、身體感覺、書記感覺に一貫して確固としてあり、生き方、考へ方、即ち文化の根源を成してゐる。縦書きはただ單に書き方に止らず、日本人としての主體性、自立性そのものである。縦書きがぐらつくと、拠つて立つ國語の、といふより日本人の基盤が揺れるのである。

安藤廣重の版畫

日本人の目（視點）の動きは右から左へ進む方向が最も自然で、根源的であり、それが文字の書き方においても、上から下へ書いたものを、續いて右から左へと行を進める縦書きの書式が情理に適つた、傳統的なものであることを述べた。このことを詳しく説明してゐる熊倉千之著『日本人の表現力と論理』（中公新書、平成二年）に基づき、さらに調べたことを付け加へて、縦書きの根本的な文化意思を明らかにする。

安藤廣重の版畫「東海道五十三次」（天保五年成立）は「右手前から左奥への描き方が多い」といふ。そこで、江戸と京都を加へた五十五枚の作品で、人物の進みゆく方向がどのやうになつてゐるかを調べた。その結果は、右から左へと移動するのが二十三枚で四十一・八％、左から右が十四枚で二十五・五％、兩方向または人物が登場しないのが十八枚で三十二・七％であつた。確かに右からが多く、滑らかに動いてゐる。次に、池田英泉、安藤廣重合作の「木曾街道（中山道）六十九次」（天保六―八年成立）を調べた。起點の日本橋と異版の中津川を加へて大津まで七十一枚ある。その結果は右からが三十枚で四十二・三％、左からが十六枚で二十二・五％、兩方向その他が二十五枚で三十五・二％であつた。兩者はまるで初めから構圖の割合を考へてゐたかのやうに一致してゐる。このことから、右から左へといふ目の動きは人や時間が進み、移つてゆく流れであり、日本人の身體活動に根幹的に馴染んでゐることが分る。

展示の陳列・藝能

その他、同書の擧げる例を述べる。展覽會などで、作品は「壁面に向かつて左方向に觀て行く」のが自然な流れであるといふ。確かに博物館や美術館などで特に意識しなくても、入口を入つて右から左に進み、順路もさう指示してゐる。また、歌舞伎の舞臺は向つて右の「上手に奥座敷、舞臺中央の居間や土間、下手の木戸や花道」といふやうに裝置されてゐる。これは「上手から下手に向かつてハレからケの世界に展開するようにしつらえて」あるからである。落語でも同じやうに、左の「下手から誰かが入つてくれば、それは主人公にとつて、何か非日常的なドラマが起こる」きつかけとなる。このことは現代の演劇でも言へることであり、とりわけ喜劇などでは左から珍人物が登場して大騒動になることが多い。

人形淨瑠璃は「上手からの語り手の聲こそが、物語を統一し意味づけ」、能樂では「能の舞臺における上座、すなわちワキ座はワキにおける曲の統一性」を示すといはれる。また、小津安二郎の映畫で、人物は右から左へと動き、遠景は左方向に向つて開き、汽車や船は左に進むといふ。この手法が「自然に調和した動きの表現」であり、穏やかに淡々と進んでゆくのである。その逆はやはり「何か非日常的なことが起こるというように構成されている」といふ。

大相撲・方位時刻法

さらに考察すると、大相撲では東の力士が西の力士よりも同位であつても上位になる。これは、北を背にして南面する天皇から見て、左が東になり、古來の左上位の思想に基づく。番付や星取表は縱書きが正則であり、東が右、西が左になる。ところが新聞では横組みにして、東を左に置くといふ異例の書き方をしてゐる。縱と横の混亂は國技にまで侵食してゐる。

古代の方位・方角・時刻法は、北を子、南を午に配し、子から卯、午から酉と、時計回り、卽ち縱書きの流れに沿つて進んでゆく。時刻の觀念は方位の觀念に卽して、上から下、右から左へと經過してゆくのである。

葛飾北齋の富嶽

葛飾北齋の版畫「富嶽三十六景」（天保三年成立）で、富士山が左右のどちらに配されてゐるかを調べた。全四十六枚のうち、右側が二十四枚で五十二・二％、左側が十八枚で三十九・一％、眞中、または描かれてゐないのが四枚で八・七％であつた。また、繪本「富嶽百景」（天

保五、六年成立）では、全百二枚のうち、右側が五十枚で四十九％、左側が三十五枚で三十四・三％、眞中その他が十七枚で十六・七％であつた。兩者ともほぼ同じ傾向を示してゐる。このことは何を意味するか。中心的な富士山がまづ右にあることによつて自然に左方向に遠景が開かれ、廣がつてゆく。富士山が左に置かれると、中心は右側の風景になるやうに感じ、右から左に向ひ、その富士山からもう一度、右の遠景に逆戻りする印象になる。

「三十六景」の「凱風快晴」、いはゆる「赤富士」は右側に富士を描き、左方向へなだらかな稜線が裾まで長く延びてゆく。背景は鰯雲が一面に廣がる。この右から左に廣く開かれゆく自然な安定感と心地よさこそ縦書きの原理そのものなのである。また、「百景」の「大尾一簞の不二」は一氣に一筆畫で富士を描いたもので、右と同じ構圖で、雲はなく單純化されてゐる。同じやうに、左側へ一直線に山容が延びきつてゐて、明るく廣やかな情感が漂ふ。

ところが、「神奈川沖浪裏」は左側に飛沫を上げて打上げる大浪を配し、小舟が翻弄され、遠い富士は眞中よりやや右寄りで小さくなつてゐる。この自然の雄大な荒々しい力は左側にあるからこそ異常さを發揮し、眞に迫つてくる。このことは「百景」の「海上の不二」と比較するとより明らかになる。これは右側から飛び上がる波しぶきが左側の富士に襲ひかからうとしてゐる。小舟はないが、「浪裏」を裏焼きしたやうな構圖である。しかし、この大波は右から左への方向であり、順調で滑らか過ぎて力強さに缺けてゐる。

左方向からの迫力

左から右への方向が非日常的で意外性をもたらすことは既述したが、この分りやすい例は「北野天神縁起繪卷」（承久本）である。菅原道眞の祟りとされる落雷は左側で炸裂し、右側には襲はれ、逃げ惑ふ人々がゐる。繪卷物は右から左に開いて展開してゆくが、逆の方向からの力が動いてゐる。

師の講義風景の繪もこれと同じく、師は左に坐し、右に弟子が聽いてゐる。日本史の教科書を調べるだけで、例へば次の圖を拾ふことができる。「法然上人繪傳」、「一遍上人繪傳」、聖堂學問所の講義風景、心學の講話「孝經童子訓」、渡邊崋山「一掃百態」の寺子屋の風景、明治初年の小學校の授業風景（錦繪）など、師は左から右に向つて、目には見えない教育の力を發揮してゐる。これは偶然の結果ではなく、日本人の生得的な意識によるものであらう。

縱書きは日本文化の基底

尾形光琳の「紅白梅圖屏風」（寶永七年ごろ成立）は右隻の右端に紅梅、左隻の左端に白梅を配す。紅梅は、幹を中心にして、枝が伸びてゐる。一方、白梅は幹が根元にだけ見え、枝が右へ垂れ下り、また上に伸びる。やはり、右隻は本體の幹から始まり、左に移つて、左隻は枝ぶりが左から右へと逆戻る方向である。ここに紅白梅の調和と躍動が見て取れる。また、眞中の流れは先を細く、手前を太く大きく描き、しかも右から左へと流れてゐる。この流水の動きこそ平靜な落ち着きとともに自然の生命の根源を感じさせるのである。

縱書きはただ單に書記の方法だけではなかつた。長年にわたつて培はれた時間・空間感覺、また美意識と關はつて、日本文化の基底を成してゐたのである。

（わかゐ いさを・京都產業大學教授）

きおふ

高崎 一郎

「シクラメンのかほり」も今ではだいぶ昔の歌になった。ワ行をハヒフヘホで書けば何でも歷史的假名遣になるものではない。專門用語で「誤れる回歸」と呼ぶ現象である。

意氣込むことを「氣負ふ」と表現する。これは本來「競ふ」と同じ言葉だったから、漢字に引かれて「きおふ」とするのは、明らかに「誤れる回歸」である。ただし實際には少なからぬ辭書が「きおふ」を認めてゐる。

一方で「思惑」「御存知」など、好ましからざる宛字とされる言葉がいくつかある。「おもわく」「ごぞんぢ」では、文法などの說明に困るからである。さりながらどれも「きおふ」と全く同じ現象ではないか。なぜ扱ひを異にするのか。

念のため確認すれば、歷史的假名遣は「平安中期以前の

文獻用例に從ふ」ことになってゐる。つまり一義的には「きおふ」は明らかな誤りである。ところが現實に出版されてゐる各種辭書では、さういった例外が隨所に見られる。上述の定義では盡せぬ部分があるからなのだが、經驗則でひっそりと處理されてしまひ、まとまった說明を見たことがない。

「おもわく」を誤りとし、「きおふ」を認める理由は大きく二つあるだらう。まづ「機能語や活用語は他の言葉より重要だから」。次に「競ふ・氣負ふはすでにそれぞれ異る言葉だから」。後者の理由はちょっと弱いが、いづれもなるほどと思はせるものはある。

「思はく」「御存じ」のやうに、通常は假名書きする部分の假名遣は、漢字に隱れる部分に比べてより重要である事、これは誰も異論ないだらう。中でも動詞や形容詞の活用にかかはる箇所は、最も注意をはらふべきである。しかしそれなら「何條(でふ)」「母者(ぢゃ)人」のやうな語は果して「重要」な部類かどうか、はなはだわかりにくい。

「氣負ふ」が「競ふ」の後身である事はほぼ明らかだから、いくら「異る言葉」だからといって「きおふ」と書いてよいとは言へない。しかし現實には由來の明瞭ならざる語はいくらでもあるし、江戸時代以來の「突き+据ゑ」で「つくゑ(机)」語源說などあっけなく否定されてしまった。從って漢字の標準的音訓を參考にするのは、それなりの合理性がある。それに「氣」を「負」ふとはなかなかよく意味を捉へてゐるではないか。

ただし「しっくひ(漆喰)」のやうに、宛字は語義に必ずしも忠實ではないし、また安定もしてゐない。山手線「惠比壽驛」は「ヱビスビール」由來であるのは頷けるが、だからといって「今宮戎」まで「ゑびす」たるべしと主張するのは無理がある。

結局、宛字どほりに讀むことは認めざるを得ないだらう。歷史的假名遣は常に現代のためにのみ存在する。なぜならこれから書く文、もしくは昔の文の手直ししか適用できないからである。「平安中期以前の用例」に從ふのは、さうすれば現代の事象がよく整理できるからである。表記法の目的は表記の安定だから、學術的正確さを求めて「誤れる回歸」を許しがたく思ふのは野暮な話である。

どうやら問題の核心は、「重要さ」といふ教育的價値觀を假名遣の書き方に持込む事の是非にある。近年の辭書では、次第に否定されつつあるやうだ。「それを言ひ始めると收拾がつかない」といふ判斷ではないか。たとへば『大辭林』の「えびす」の項には次のやうな記述がある。

…一般に「惠比須」と當てることが多く、この場合の歷史的假名遣は「ゑびす」

また『日本國語大辭典(第二版)』は、同じ立場を更に徹底させてゐる。いくつか項目を列擧してみよう。

○きお・う(きほふ)【競・勢・氣負(キおふ)】
○おもわ-く(おもは:)【思・思惑(ワク)】
○ご-ぞんじ【御存・御存知(ヂ)】

二通り以上の書き方がならびたつのは煩雜でもあり、歷史的假名遣的な語意識からすると違和感が殘るかもしれないが、すっきり理解しやすいし、實態にもよく合ってゐると私は思ふ。

宛字は漢字圈の言語で普遍的な現象である。假借文字や形聲文字それに萬葉假名まで、元はといへば宛字であった。國字の「鳰」は「にふ(入)」を音符にした形聲文字で「にほどり」を表すといふ。また新潟の「妙高山」はもと「名香山」で、その前は「越の中山」であったさうだ。我が國の宛字は特に多彩で、興味が盡きない。

(たかさき いちらう・高崎齒科醫院院長、本會評議員)

だぢづでどの話（第二回）

高田　友

健太　hとbは無聲音と有聲音の對立ぢやないんですか。

高田　うん。だから、「ハ」と「バ」は發音するときの口の形が全然違ふんだよ。ところで、bの無聲音は何だと思ふ？

健太　「バ」と言ふつもりで、喉を鳴らさなきやいいんですよね。「バ」、「バ」。あッ。pですよね。

高田　さうなんだよ。

健太　ぢやあ、ここでも、日本語の發音の整合性が破れてゐるんですね。先生のお好きな「整合性」つて、かういふときに使ふんですか。

高田　整合性といふ言葉の使ひ方はそれで正しいんだが、實は整合性が破れたのは後世になつての話で、古代日本語では綺麗な對應をしてゐたんだ。

健太　まさか、「ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ」が「パ・ピ・プ・ペ・ポ」だつたとか？

高田　その「まさか」なんだよ。奈良時代には「ファ・フィ・フ・フェ・フォ」だつたやうだが、もつと昔には「パ・ピ・プ・ペ・ポ」だつただらうと推定されてゐるんだ。

健太　奈良時代に「ファ・フィ・フ・フェ・フォ」だつたつて、どうして分かるんですか。

高田　漢字の音から分かるんだよ。古代中國語の發音は今一つはつきりしないところがあるんだが、現代中國語の發音と日本語の音讀みを比べてみると、面白い對應關係があるんだ。「方」といふ字の音讀みの頭の子音は日本語では何だね。

健太　「ホウ」だから、hですよね。

高田　うん。ところが、現代中國語では「方」の字はfang（ファン／ファング）と發音するんだ。頭の子音はfなんだ。他の例を調べると、たいてい、日本語でhなのは、現代中國語ではfかpなんだよ。「片（ヘン）」はpiàn（ピエン）だしね。つまり、漢字が日本に入つて來た頃には、ハ行音の子音はpからfに移行する時期だつたんだ。そして、世界の言語の發音の推移を見ると、p→f→hと變つて行く傾向が認められるんだ。

健太　へえ。面白いですね。でも、それぢやあ、中國でhの音だつた漢字はどういふ音讀みになつたんですか。

高田　中國のhは日本語ではkになつた。「漢」の字は中國語ではhàn。これは昔も今も變はつてゐないらしい。

それが、當時の日本にはkの音がなかつたから、kaと聞こえた。そこで、音讀みは「カン」になつたといふわけだ。

健太　またハ行に戻りますが、「ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ」が「パ・ピ・プ・ペ・ポ」だつたといふことは、「拂ふ」は「パラウ」と讀んでゐたといふことですか。

高田　違ふよ。君も古文で習つたらう。「はらふ」と書いてゐたんだから、「パラプ」と讀んでゐたのさ。

健太　ええッー　下の「ふ」も「ウ」ぢやなくて、「プ」だつたんですか。

高田　當り前だよ。だから、さういふ假名遣ひになつたんだ。

健太　ちよつと待つて下さいよ。ぢやあ、「母」は「パパ」だつたんですか。

高田　そのとほりだよ。

健太　英語と逆なんですか。話がうますぎるやうな氣がするけど。

高田　p, f, t, m, ch などは、赤ん坊が發音しやすい子音なんだ。だから、生まれて初めて發音する言葉は「パパ」とか「ママ」とかいふ音になる。そこで、子供が「パパ」と發音するのを聞いて、西洋人はお父さんを呼んでゐると思ひ、日本人はお母さんを呼んでゐると思つたのさ。「ママ」は西洋ではお母さん、日本では御飯のことになつたのさ。

健太　ごはん？

高田　ごはんのことを「おまんま」といふぢやないか。

健太　なるほど。

高田　今度は「父」だ。ちよつと難問だよ。ひたすら論理的整合性だけを考へてみてくれ。「父」は古代日本語では何と發音されてゐたと思ふかね。

健太　「タ・チ・ツ・テ・ト」の發音は古代には、「タ・ティ・トゥ・テ・ト」だつたことになりますよね。ぢやあ、「チチ」は「ティティ」だつたんだ。あ。さうか、これも赤ん坊に發音しやすい子音なんですね。

高田　うん。まあ、チチも ch だから、發音はしやすいんだがね。t→ch→s の順に難しくなる。ほら、子供の名前の敬稱を考へてごらん。

健太　あッ。僕の從妹なんか、「美代たん」がちよつと大きくなつたら、「美代ちやん」になりましたよ。大人になると、「美代子さん」になるんですね。

高田　うん。さういふふうに、日常の中から言語現象を拾ひ上げるのが想像力なんだよ。ところで、「ハハ」が濁ると「ババ」で、「チチ」が濁ると「ヂヂ」になる。日本語の造語法が察せられて面白いだらう。

健太　あ。閃いた。「ちち」の發音は「ティティ」だから、

「ぢぢ」は「ディディ」だつたことになりますね。

高田　そのとほりだよ。君の賢さには驚くね。なんで浪人したんだらう。

健太　人の心の傷に觸れないで下さいよ。

高田　「ちぢ」にしても、「ティティ」にしても、もう一つ意味があるだらう。

健太　あッ。さうか。おつぱいのことだ。これも赤ん坊にとつては大事なものですものね。

　ところで、さつき、「し」は「スィ」だといふ話をしましたよね。「箸」は「ハスィ」。いや、違つた。「は」は「パ」だから、「パスィ」だつたんですね。

高田　いや、ここにもう一つ問題がある。サ行音も古代には ʃ ぢやあなかつたんだ。

健太　ʃ でなきや何だつたんですか。

高田　ʦ だつたと言はれてゐる。

健太　中國語の ʦ をサ行で受けてゐるんですか。

高田　漢字音との對應を考へると、ʦ も s もサ行で受けてゐるから、そこからは判斷がつかないんだ。もう一つの判斷基準がある。

　現代日本語のザ行音は音聲學的に嚴密に評價すると、z ではなく dz なんだ。z と dz の違いは、cars と cards の語尾の子音の違ひなんだ。

健太　なるほど、發音記號でも z と dz に書き分けますものね。

高田　清音は日常生活でよく使はれるから、音も變化しやすい。ところが、濁音はあまり使はれないから、變化しにくい。そこで、サ行音よりはザ行音の方が古い形を殘してゐると考へられる。ザ行音の子音が dz で、これが古い形であるものなら——。

健太　なるほど、サ行音の子音は ʦ になりますね。「箸」は「パツィ」といふ發音だつたんだ。

高田　さうだよ。ところで、萬葉集に「笹の葉は深山もさやに」と始まる歌があるが、「笹の葉は」は何と發音しただらう。

健太　ツァツァノパワですね。

高田　ははは。ひつかかつた。ツァツァノパパだね。

健太　助詞の「は」も「パ」なんですか。

高田　それが論理的整合性といふものだらう。もつとも、さつき言つたやうに、萬葉時代にはもう p でなく、f になつてゐたから、正確には「ツァツァノファファ」だつたんだけどね。

（つづく）

（たかだ いう・豫備校講師）

會員通信

出口　確

初めて身近な所で歴史的かな遣ひを意識したのは、小學六年生の終はりの頃であつたと思ひます。それ以前にも、目にする機會はあつたには違ひないが、たゞ古い書き方だと濟ませてきました。それが、特に氣にかけたのは、新聞記事の切り抜き、產經新聞に載つた、小堀桂一郎氏や長谷川三千子女史の文章を見てでありました。現代語の文章にわざ〳〵「古い書き方」をするには何か譯があるのだらうと思ひ、天邪鬼の氣質もあつて、その譯が知りたく、自分でも書きたく思ひました。

そんな中、どのやうな次第であつたか、福田恆存氏の『私の國語教室』てふ一本に出會ひ、一本全てを解するにはとても及ばなかつたものの「現代かなづかい」がどれほど理に適はず、いい加減であるか、この一本で「譯」の理解が進みました。

ところで、さうして「譯」を知り、愈々身につけたうなつた書き方のはうは、確かに『私の國語教室』で學ばうとはするのですが、「上一段」とあつても、當時は未だ何のことかわからず、しばらくは習得出來ずにゐました。それが書けるやうになつたのは、文法學習のお蔭であります。僕の通ふ學校では、中學一年で口語文法を、二年で文語文法を、みつちりと教はります。また一年生から英文法の學習も始まりました。こゝで體系的に文法を學んだことで、「ゐ」「い」「ひ」の遣ひ分けが、「やう」と「よう」との違ひが、「五段活用」をでつちあげざるをえぬ現代かなの不合理が、はつきりと目に見えてわかり、まさに目を開かれ、溜飲の下る思ひがし、言葉にたいする意識も大きく變はりました。

學校における國文法の教授は不用との意見があるけれども、自身が文法によつて世の中の見方が變はつたと云つても過言でない經驗をし、古典も大好きになつた以上、この意見には諾へぬのであります。

あの新聞の、小堀氏、長谷川女史の文章と、福田氏の本と、文法とにめぐり會へたのは、大變に有難いことだと、さう思つてゐます。

國語をめぐる實情は洵に嚴しい。周圍には、齡の大小を問はず、「古文」「文語」「古典」「歴史的かな遣ひ」の別も辨へぬ人が多くゐて、惘然とする他ない。かういふ人々は、國語に關心がないのです。

もはや等閑にされた觀※のある憲法改正ですが、まだ論議の活潑だつた頃には、各種の私案や様々の論點が提示されてゐたけれども、いづれも足並を揃へて略字新かな、表記にくわんする議論は耳にしたことすらありません。內容は中途半端に變はり、表記は略字新かなでは、改惡ではないか。

しかし今でも學校敎育、特に敎科書においては、芥川や中島の口語の文章は新表記にされてはゐますが、正かなの詩は原文どほり、古文漢文は正かなで、漢文は正字體を示してゐるものもあり、これは最後の良識ではなからうか。然るに書店に並ぶ漢文の本は殆どが新表記であります。また、文語文を新かなに改め、それを「讀みやすくするため」などとするもの（例へば岩波文庫の『蹇蹇錄』や『吉田松陰』）もある。厚顏無恥とはこのことだと思ひます。

戰前も戰後も、國語改惡の動きは國內にありました。今に到るまで狀況の改まらぬ、その責任は、GHQではなくて、日本人自身にある、日本人が、「國語」を自らの意識のうちに取り戻さねばならぬ、若輩が勇み足やもしれませんが、その手立てを摸索中です。

自らがものを考へる日本語、國語、それを保守せずして、何を保守するのか。

（※）この機會に、最近觀察される新たな國語の誤用について報告する。形式名詞「觀」或いは「感」は、「～である樣子」「～である氣分、感覺」といつた意味を表すが、特に後者について、動詞に直續する場合に、これを一つの複合語として捉へ、發音する者が增えてゐる。テレヴィでも耳にした。

例 ①「みんなつかれてる感がある」
②「休み明けで、だれてる感一杯だ」

①②とも、本來は、「つかれて（ゐ）る（の）感」「だれて（ゐ）る（の）感」と、前の部分にアクセントがくるべきところを、「て」までを平板に發音し、「る」にアクセントをつけてゐる。「疲れてる感」「だれてる感」を一つの語として話してゐると思はれる。

（でぐち かたし・平成二年生、奈良縣 西大和學園高等學校生徒）

俳句和歌投稿

夕暮れにさくらのなかを歩きけり
北風や歩けど歩けど石の街
どぶ板の下も流るる春の水
裏窓のおしめ吹きぬく春の風
梅咲くや屋敷のなかに人の聲

横山　東洋夫

櫻花遊行

咲き満ちてひとつの花もこぼすなき櫻は幹をかがよはせ立つ
みづからの花の重みにおのづから總身ふるふ若き櫻木
ひとしきりまた一しきり降る花のあひだ間のしじまを愛す
舞ひ散りて地に着くまでに花びらのさまざま帶ぶる翳のかそけさ

苫名　康

櫻花散り敷く土の照りかへす前に身を置き兆す既視感

不破　淑子

遊き日

しみじみと碧き眸に見入りたりかく美しき男の子なりしか
お互ひに若かつたねと笑む君のその顏容の愛らしきかな

黄昏

永へて恥、悔多きあけくれと東雲の空を歎きつつ仰ぐ
永へて夢かとまがふ數々の悲しき苦しき音信に哭く
獨り往くこの路狹く險しけれどマナ降らす天主の守り給ふにや

町田　孤子

鳳凰堂の裏で眠れり頼政の無念の土で扇の芝なる
金堂の脇が括れし壁畫こそ寺の柱はエンタシスなれ

安東　路翠

［ア行冠］

宇野精一先生、鎌田正先生のお手紙を前に

えいえいと偏に築き終戰の後の國土にかくも清しく

須賀川出土の冠埴輪を

御冠の埴輪の女酋治めゐし乙字ヶ瀧の速き大曲

古道をゆく

大杉に添うて登りし石甃まうでし道を肅氣は洗ふ

［外ツ國百首］

西班牙の中庭

野の花とアルハムブラに憩へれば異冠の堰より眞清水は噴く

米國の軍事政策をニュースで觀る（佛蘭西にて）

過ぎし日も原爆を生む日重ねゐしわがはらからを見るによしなし

シラク大統領の會見ニュース

國聯に學び來たりし科學の子生みし水爆試みんとふ

「閑かさや馬が飛び込む水の音」（佛蘭西にて）

ルーラルの窓邊を飾るカリカチュア旅を語れば心足らへり

正法眼藏「都幾」と全快祝ひ

若葉風受けてたどればリベリアの華やぎし旅今ぞ都幾なる

紀元前二世紀、山頂遺跡（土耳古）

ネムルート嶺に遺りし神人の石像遠く世紀を彫れる

アヤソフィア遺跡にて（土耳古）

アンタレス光れる丘は芽吹きして幽かに薄く彩の發ちゆく

［五回　契沖顯彰短歌大會より］

吉原　榮德

室生寺に契沖の呪文仄聞きぬ御堂に紅葉亂れ舞ふ宵

稲葉　和子

國守ると特攻なりし顔さへも覺えぬ兄の魂鎭祭に行く

契沖の心澄ませし山井なし今は詠み置く歌にのみ知る

契沖の孤獨託てし山居にも和めしものは幽絶の景

松岡　隆範

かへりみて我が運勢は強くあれば癌の告知に心さわがず

癌を病む身にはありともたひらけくなほ十年を生きむとぞ思ふ

抗癌の強き薬に毛の抜けてまるまる禿となりにけるかも

抗癌の薬に禿となりにたるわが相貌を鏡にうつす

カトリック信徒の友がフランスのルルドの水を送りおこせり

市川　浩

契沖の清けき流に美しき國と言の幸はへてあれ

谷田貝　常夫

室生寺の修行中に契沖、おのれより頭を岩に打付けたることありと聞く

十一面觀音像、中尊釋迦像の思ひいだされて

十一の頭頂きすくと立つ貴なる御姿契沖を搏つ

頭打ちて死なんずらんと試みるも契沖生きよと室生の御佛

あえかなる筋にて彫れる磨崖佛大野寺に垂る櫻と匂ふ

後書

今年のホウムペイジは、正月に音讀のペイジを設けた。お聞きになつたことがあるだらうか。盲人のために今年八十六歳の後藤百合子さんが、あのアンデルセンの長い小説、森鷗外の飜譯、による『卽興詩人』を音讀し、しかしそれは區立の圖書館に置かれて、健常者には聽かせられないとの嘆きを、本協議會が引受けてホウムペイジに載せ、普通の人にも聞かれるやうにしたものです。注まで聲にでるのが耳ざはりですが、鷗外文語文の階調が汲み取れませう。

今年は、協議會にとつて劃期的ともいへることが二件ありました。昨年からの動きですが、理事の滝沢幸助元衆議院議員の働きかけで、「国語を考える国会議員懇談会（通稱國語議聯）の發起人會が四月に開かれました。本協議會の協力もあつて、當面の課題を「一、穴あき五十音圖の是正（「ゐ」と「ゑ」の學習）、一、國歌君が代（歌詞）表記の是正（「いわお」でなく「いはほ」へ）」と掲げました。いづれ漢字の問題にも及びます。五月には設立總會が開かれ、參加議員は七十一名（九月末現在では七十四名）の多きに達しました。六月の定例會には、文部科學省から一名、文化廳から二名、及び「日本語」特別教育區を作つた世田谷區の教育長を呼んで、それぞれの國語教育に對する取組み姿勢を伺つた。

六月二十一日には、京都で懇話會を開きました。本會は少數ながら、會員が北は北海道から南は沖縄までをり、全國規模であることが誇でもあります。そのため東の方ばかりの活動ではなく、西でも講演會などが開かれたらと願つてきましたが、その足がかりが今回の懇話會で、東京からは松岡隆範理事と谷田貝が參加し、出席者は十八名でしたが、若井勳夫、早川聞多兩理事の講演の後、活潑な發言の應酬があつて、それは活氣にあふれた會合でした。日頃の職場環境には全く缺けてゐる國語問題の話ができたことを喜びとされた方もゐて、意義ある關西での集りが開けたのも、事務方を引受け、萬全の準備をしてくださつた前田嘉則評議員のお蔭と感謝してゐます。

以上

（事務局長 谷田貝常夫）

～～正統表記のための實用工具紹介～～

「國語國字」通卷ＤＶＤ　本會會報創刊號（昭和三十五年）より第一八五號（平成十七年）迄の全頁をＤＶＤ一枚に電子畫像掲載。

税込價格　一二、六〇〇圓　書肆　横濱五十番館（http://literature.jp/）發行

「今昔文字鏡」単漢字15万字版 ver. 4.00（ＣＤ－ＲＯＭ）

ＵｎｉｃｏｄｅのＣＪＫＶ漢字はもちろん、諸橋大漢和辭典收錄の約五萬字、古くは甲骨文字から梵字、現代中國で使はれてゐる簡體字まで多種多様な文字を收錄。廣大な漢字世界を體系づけ、檢索、印字等その用途は無限！

税込價格　二九、四〇〇圓　文字鏡研究会編　紀伊國屋書店刊

正統國語ソフト「契冲」ver. 19.0　歷史的假名遣、正漢字をパソコンで完全表現！Ｖｉｓｔａでも使へる。字音假名遣による同音異義語の打分けにも對應。

税込價格　二八、三五〇圓　有限會社申申閣（http://www5a.biglobe.ne.jp/~keichu/）

平成疑問假名遣（平成十七年版）　字音はもちろん動植物・地名人名、さらには企業名や專門用語まで、注意すべき言葉をあまねく網羅。

最新の改訂は http://homepage3.nifty.com/gimon/ 參照。

税込價格　一、五七五圓　國語問題協議會發行　紀伊國屋書店發賣

關聯電網

國語問題協議會　http://kokumonkyo.jp/
國語問題協議會傳言板　http://d.hatena.ne.jp/kokugokyo/
文語の苑　http://www008.upp.so-net.ne.jp/bungsono/
文字鏡研究会　http://www.mojikyo.org/

㈲申申閣（「契冲」）http://www5a.biglobe.ne.jp/~keichu/
横濱五十番館　http://literature.jp/
平成疑問假名遣（髙﨑一郎）http://homepage3.nifty.com/gimon/
日本漢字教育振興協會　http://www.kanji-kyoiku.com/
石井式国語教育研究会　http://www.isiisiki.co.jp/
高池法律事務所　http://www.takaike.com/
地獄の箴言（木村　貴）http://kimura39.txt-nifty.com/
現代國語への處方箋（蓮沼利夫）http://www.geocities.jp/kokugo_shohousen/
言葉の救はれ―福田恆存論（前田嘉則）http://logos.blogzine.jp/1/

平成二十年十一月八日發行（第百九十一號）
創刊昭和三十五年十二月一日（通巻百九十一號）

編輯・發行　國語問題協議會

東京都大田區久ケ原三丁目二十四の六
郵便番號　一四六－〇〇八五
電話　〇八〇－三四一一－五五〇一
ファックス　〇五〇－三五八八－六七一五
電郵　035908935６@everynet.jp
URL:http://kokumonkyo.jp/